

We

女と男の家庭科新時代

6

2002



特集

力の再定義

- 女と力 堀田 碧
- 英会話と、仕事と、人生 石原 みき子
- 「おんな」と「英語」と「仕事」 吉原 令子
- DVのサポート活動を通して 野口 真理子
- アメリカ先住民を訪ねて 佐藤 葉

いつものまにか元気になれる場所
フェミックス

●あなたの視野を広げます。

月刊誌『くらしと教育をつなぐWe』を発行。

A5判 64頁・680円・年間講読料7500円(送料込・年10冊発行)

●あなたの表現活動をサポートします。

単行本、ハンドブック、会報、パンフレットなどの制作をお手伝いします。

●あなたの悩みを共に考え、自分らしく生きることを応援します。

個人カウンセリング1時間6000円(予約制)。自己主張トレーニング、カウンセリング講座、各種ワークショップを企画・開催しています。パンフレット等ご入り用の方はお気軽にお問い合わせください。

★通信制AT/自己尊重講座

フェミックスでは一人でもできる「通信制のAT」を行っています。言いたいことがうまく言えない自分を整理し、自分なりにアサーティブになれるように、おひとりおひとりに合わせて課題を出します。回数は12回、期間は、12ヶ月～18ヶ月。料金は35000円です。

●フェミックス電話相談 TEL03-3410-9937

※時間帯：月～金(土日祝日を除く)10:30～18:00

前もって予約していただければ、これ以外の時間帯でもご利用可能です。

※利用料金：30分以内は3000円 30分～60分まで6000円

相談終了後、振込用紙をお送りしますので、1週間以内にお振込をお願いします。

からだで感じるエンパワメント

自己防衛プログラム・WEN-DOワークショップ

★初心者コース 8月17日(土)・18日(日)

2002年8月17日(土)・18日(日) 両日とも9:00～17:00

会場=国立オリンピック記念青少年総合センター・カルチャー棟・演劇室

インストラクター=キユースティ・パークレー

参加費=2日間で14000円 通訳あり 定員=15人(要予約 先着順)

※参加は女性に限らせていただきます。

※初心者コースに参加すると、指導者養成コースの受講資格を得ることができます。

★指導者養成コース 8月26日(月)～31日(土)

このコースは学校や地域で、初心者向けのWen-Doを広げるために、3時間のワークショップを提供できる資格を取得する目的で開催されます。

2002年8月26日(月)～31日(土)(全6日間)

会場=女神山ライフセンター(長野県上田市 別所温泉そば)

インストラクター=デボラ・チャード

参加費=100,000円 ※参加費6日間で5万円、及び5泊6日の宿泊費と食費で5万円

定員:10名(先着順)

※参加資格=初心者コースに参加した経験があり、5泊6日の全日程に参加できる人。

なお逐次通訳は入れませんので語学力に不安のある方はご相談下さい。

講座の
ご案内

詳細はお問い合せください。

◎お問い合わせ・お申し込みは下記までどうぞ

TEL/ FAX 03-3424-3603

E-mail femix@mail2.alpha-net.ne.jp

〒154-0001 東京都世田谷区池尻3-2-3 703

東急新玉川線(渋谷より1駅3分)池尻大橋駅下車西口より徒歩1分

ホームページ: <http://www3.alpha-net.ne.jp/users/femix>

郵便振替 00130-7-754314 みずほ銀行 池尻大橋出張所 1501277

フェミックス電話相談 TEL03-3410-9937

Femix
フェミックス

フェミックスは出版とフェミニストセラピーによるカウンセリングを事業の両輪としています

特集 力の再定義

女と力	堀田 碧	4
英会話と、仕事と、人生	石原みき子	9
「おんな」と「英語」と「仕事」 —女は英語でよみがえる	吉原 令子	13
DVのサポート活動を通して	野口真理子	17
アメリカ先住民を訪ねて	佐藤 葉	22
相反するもののあいだでバランスをとって生きる —アメリカ先住民の知恵に学ぶ	稲邑 恭子	29

■女と男の家庭科新時代

新・オホーツクの潮風荒く	江口凡太郎	32
曲がり角の家庭科 18 新しい時代に向けて 5	梶原 公子	33
食の歳時記 第33回 夏みかんは初夏の味	入江 一恵	41

■連載

家事神話 女性の貧困のかけにあるもの<番外編> 「家事戦争」を乗り越える (上) 家事労働の請求書	竹信三恵子	43
職場の男とつきあう法 第3回 ドラマ・フレンド	満田 康子	48
乱読大魔王日記 第33回	冠野 文	50
過去を振り返らない／先を考えない 第22回 価値の基準が変わる	松本 一郎	52
徒然なるままに from USA 第3回 ホーム・すくーりんぐ	二見れい子	54
3年1組の12ヶ月 第13回	来 陽子	56
女が歳をとるということ 第63回 ことば	木村 栄	61

特集 力の再定義

今月号は、「力」と「エンパワメント」をめぐって、さまざまな視点から寄稿していただいた。

巻頭の堀田碧さんの「女と力」をめぐる論考は、連続講座「現代を生きる女性学」のなかで、ブラックフェミニスト、ベル・フックスの『Feminist Theory from margin to center』の翻訳をテキストに読んだあとの話し合いのなかから生まれた。ベルフックスの著作を道しるべのようにして日本のフェミニズムの状況を読み解いていくうちに、これからのいちばん大切な課題として浮かび上がってきたのは（「序列をつくらない」、（支配することもされない）場や関係をつくっていくのにはどうしたらいいのだろう、ということだった。——それはもはや言葉で説明できる領域ではないのかもしれないと堀田さんと確認し合いながら、それでも、とりあえず頭に浮かんだのは次の3つのことだった。①権力が暴走しないための歯止めを制度のなかにつくる、②支配の窓口にはどのようなものがあるか、見える形に示し、気づいてもらう、③実際に支配をすることもされない関係の場をつくり「体得」してもらう。

②に関しては、ノルウエーのジェンダーフリー教育用テキスト『男女平等の本』の著者の一人アウド・ランボーさんが、九八年に来日したときの講演のなかでふれた、ノルウエーの女性学研究者ベリット・オースが提唱した「支配のテクニク」——①「存在の潜在化」（取るに足らないと無視あるいは軽視する）、②嘲笑する、③情報の秘匿（何が起こっているか知らせないようにする）、④二重の懲罰（やってもやらなくても非難する）、⑤罪悪感や羞恥心を抱かせる、⑥無価値化（自分のやっていることを価値ないことだと感じさせる）——が、女性や他の社会集団を間接的に巧妙に支配するさまざまな手法を鮮やかに見せてくれる。（『ジェンダーセンシティブからジェンダーフリーへ』すずさわ書店87頁）。

悲しいことにこれは男から女だけに限らず、親や教師から子どもへ、女同士でも（フェミニズム運動も

また例外ではない)行われている。欧米社会はこれらの明確な論理化と分析の作業を通して、自らが生み出した支配と権力の暴走に歯止めをかけるためのさまざまな試みをしてきた。

③については、上記のように理論を介してではなく身体感覚のレベルで体感し学習するやりかた(さまざまな身体技法を生み出した(東)の私たちにとってこれは本来得意な分野のはずだ)。たとえば、指揮者の完璧なコントロールド下にあるクラシック音楽と比較した、インドネシアの「ケチャ」(みんながばらばら好き勝手をやっているようにでなんとなく調和がとれている)のイメージ、佐藤葉さんが描くアメリカ先住民の文化 価値観も一つのヒントになるだろう。

吉原令子さんと石原みき子さんの話は、「おんな」と「英語」と「仕事」をテーマに開催されたシンポジウムでの問題提起。英語が女にとつて「エンパワメント」の武器になると同時に、権力へのアクセスと同様の屈折をはらむことを示唆している。

九六年秋に朴和美さんの発案で英語講座『Colors of English』を始めたときに前提として確認したのは、英語の中に潜む権力関係に自覚的でありたいということ、人種や階級の多様性を大事にしつつ英語を学びたいということだった(九六年八・九月号参照)。英語を学ぶ上でぶつからざるをえない「欧米が優れていて非欧米が劣る」という欧米文化中心主義。英語ができる(できないで、自分を差別化)序列化する意識。それらに自分を同化することなく英語を学びたい、と始まった『Colors of English』——それから五年半、「権力」と「エンパワメント」をめぐる試行錯誤の場として、東と西のフェミニニストたちの出会いと創造の場として機能してきたことが嬉しい。

野口真理子さんには、序列をつくらない・女が分断されない援助の実現をめざして地域でつくってきた、DV女性支援ネットワークの活動について書いていただいた。ここで提起されている(当事者の自己決定の支援)とか(当事者を責めない支援)という原則自体に異議を申し立てる人はいないだろう。いちばんの問題は、正しい原則を言い続けることが間違わない保証には少しもならないということだ。(支配することもされることもない)関係は、女にとつてもむずかしい。(稲邑)

女と力

堀田 碧
(翻訳家 / 和光大学講師)

●「女と力」について考えた二つの理由

「女と力」について考えてみたいと思ったのには、二つの理由がある。

一つは、このかんの「基本法以後」状況の中で、女もいよいよはつきりと権力を持ちはじめたことだ。女性を全体として公的な場所から「排除」する政策から、「動員」して使えるものはどしどし使う、というふうに、ついに政策転換が行われた（この種の政策転換は、欧米では七〇年代に行われた）。その中で、これまで「権力へのアクセスを基本的に否定され」ていた女性が、いまや部分的ではあれ、そしてまた、あくまで男性権力者のお墨付きのもとではあるが、男性が占有してきた政治的・経済的な権力を手にすることができるようになった。このことが、日本の女にとって何を意味するのか、わたしはち

はきちんと考えてみなければならぬ。

二つめには、ではフェミニズムが言ってきた「エンパワメント」「女が力をつけること」とは、果たして「権力をもつこと」と同じなのか、もしそうだとしたら、それは男社会の「力」と変わらないのではないかという疑問である。

●「権力としての力」と女性について

まず、「権力としての力」と女について、考えてみる。

権力としての力とは、人を支配したり管理したりできる力のことだ。フェミニズムはそれに対して、「女性は権力を行使することを許されてこなかった」という認識に立って、権力者としての男性による女性の支配を批判することから出発してきた。

そこからまず出てくるのは、女性だけが権力から排除されているのをおかしい、不公平だ、だから、女性も権力にアクセスできるように要求する、という考え方。これは基本的には「リベラル・フェミニズム」と呼ばれるアプローチで、いまの社会の権力構造はひとまず前提としながら、そこでの「権力へのアクセス」における不平等や不均衡を問題にする。

この要求の中心を担うのはふつう、中流の、つまり権力を手にする可能性のある女性たちだ。これは女性が、まさに「女性であること」によって全般的に権力から排除されている状況があるときには、それに対する異議申し立てとして大変重要なものだし、男性権力と真つ向かに対立するものとならざるをえない。その意味で、単に中流女性の支持を集めるだけでなく、男性による支配や不平等に怒りを抱くあらゆる女性たちの声を代弁するものともなる。

ただし、この「女に権力を」という要求が普遍的な意義をもつのは、皮肉にも「女は権力にアクセスできない」という状況があることが前提である。だから、女性もある程度権力にアクセスできるようになると、その要求の意義は相対的に低くなるし、同時に、弱点も現れてくる。

その弱点とは何かというと、ひとつには、現存する社

会の権力構造を前提とすることから、男社会の男性権力をモデルとしがちだということ。男性権力モデルに無批判だと、「男の支配」を単に「女の支配」に替えることで満足してしまう危険性があるし、最悪の場合には、「女にも分け前をよこせ」の利権要求や「女であるわたしにも特権をよこせ」の自己利害要求に墮してしまふ。

もうひとつの弱点は、それとも関連があるが、「権力を獲得していく過程とは支配的文化を受け入れる過程でもある」ということへの無自覚だ。たしかに、女性は権力から排除されてきたことでたくさんの辛さや痛みを知っているかもしれないが、だから権力を持てば「良いこと」をする、とは限らない。権力から排除されてきた人が権力を手にしたときに、それを個人的な「復讐」の機会にしてしまうことはありうるし、女性にはそういうことはありえない、女は生まれながらにして「やさしい」「正しい」のだというなら、それはフェミニズムが反対してきた「生物学的決定論」の裏返しだ。

● 「権力はすべて悪い」のか？

では、「権力を獲得していく過程とは支配的文化を受け入れる過程でもある」ということを確認するとは、どういうことか。「だから権力の座につくべきではない」とい

うことか。実際、現存する社会の権力構造に批判的な、いわゆる「ラディカルな」アプローチをとるフェミニニストの中には、権力の存在や権力へのアクセスに全般的に懐疑的・批判的な立場をとるものもいる。こうしたアプローチは「男性権力モデルに批判的」だったり「権力関係に敏感」だったりする点で評価されるべきだが、重大な問題ははらんでいる。とくに、女性が権力にアクセスできるようにすると、その弱点は全面開花する。

ひとつには、権力は何でも悪いときめつけてしまうことからせつかく影響力を発揮できるチャンスを逃して、自ら影響力をもてない立場にどんどん陥っていつてしまうことだ。女性も公的権力にアクセスできるという有利な状況を目的の実現に活かすことができず、むしろ警戒して権力から遠ざかることで、結局、小さな集団の自己満足的な運動に終始することになる。

もうひとつは、運動の内部においてもあらゆる権力を否定することで運動を枯渇させてしまうこと。たとえば、運動にいつさいのリーダーシップを認めない、といったことに固執すると、運動自体の有効性や成長の可能性もそこなわれてしまう。そのときの問題は、「リーダーシップをとる」ことと「リーダーになりたい欲望」とを一緒くたにしてしまうことであって、リーダーシップは、そ

の運動が一定の政治的有効性をもとうとするなら否定されるべきではない。問題が起ころのは、それがグループの他のメンバーを「支配したいという欲求」にすりかわることなのである。カリスマ的リーダーを仰ぐことも、いつさいのリーダーシップを認めないことも、正反対に見えて、結局「力とは支配する力のことだ」と信じている点で、実はメダルの裏表である。

●権力とつきあう——いくつかのヒント

ただ権力を手にすればよいわけでもなければ、やみくもに権力を否定すればよいのでもないとするなら、では、女はどう権力とつきあうべきなのか。いま、日本の女たちの前に開けているこの新しい状況に、わたしたちはどう対応したらいいのか。

まず、二元論に立たないこと。わたしたちは「女に権力を」と言い、同時に「女だからといって良いとは限らない」と言う。肝心なのは、この一見矛盾する主張を「どちらか」とは考えないこと、一緒くたにしないことだ。そして具体的な場面で、状況によって、相手によって、力関係によって、「いつ何を誰に言うか」を決めればよい。「いつも絶対に正しい」ことなどないのだ。

大切なのは、「どうやって権力を獲得するか」だけでな

く、「獲得した権力で何をするか」ではないか。獲得した権力を使って、新しいビジョンや価値観をつくってゆくこと。その過程で権力そのものを相対化してゆくこと。目的が正しければ権力の行使が正当化される、というのではなく、どういうふうに権力を使うか、どういうプロセスをとるのが目的を検証するのだということ。「正しくない支配」に代えて「正しい支配」をするのでなく、「支配とは正しくないものだ」ということをオープンにできる関係をつくること。主張している「内容」よりもむしろ、「プロセス」や「スタイル」こそが、その個人なり組織なりが体現するフェミニズムの政治の本身そのものなのだということをはっきりさせる必要がある。だから「実践」「場づくり」が問われるし、そこから、男性権力モデルとは違う新しい「力」のモデルをつくってゆくことも可能になるだろう。

わたしたちは皆、この社会に生きて、この社会の「支配のルール」を内面化している。だから、「支配的になつてはならない」などと「正しいお題目」を唱えるのではなく、「権力とは支配すること」だと知つたうえで、「支配をなくすために支配する」という矛盾を引き受けるしかない。「まちがってはならない」のではなく、「まちがったら直せばいい」のだ。女たちは今、誰もまだやってい

ないことをやるうとしてるのである。あらかじめ答えはない。それを楽しめたらいいと思う。

●エンパワメントと「内なる力」

これまで、「女と権力」について問題にしてきたが、それでは「力＝権力」なのだろうか。

フェミニズムの中で使われる「エンパワメント」という言葉がある。これは国会に女性議員を送れとか、権力へのアクセスを増やせという意味でも使われるが、もっと大切なのは、それぞれの女性たちが持っている「力」を引き出す、という意味である。つまり、「力」には、「権力としての力」「人を支配し強制する力」の他に、人をもともともっている「力」、いわば「内なる力」があるということだ。フェミニズムは「権力としての力」を焦点化すると同時に、こういう「力」をも問題にしてきた。というのは、女性たちは権力にアクセスできないなかでも、そうした「内面の力」を育んできたからである。

では、そういう「力」とはどんなものか。

「内面の力」は、まず何よりも自分の内から発して自分を支える力、自分のなかから湧き出てくる力だ。それは結果として、他人に影響を与えたり、他人を動かしたりすることがあるが、もともと「他人のため」ではなく

「自分のため」の力。つきつめて考えると、きっとそれは人間を人間たらしめているもの、生命のエネルギーの輝きのようなものかもしれない。そう考えると、「エンパワメント」という言葉はとても意味が深い。それは何か既成の「力」を獲得したりするようなことをはるかに超えて、わたしたちのもつ可能性を解き放つこと、わたしたちが変わることを意味する。

こうして気づくことだが、権力の中心部ではなく周縁にいる者にとつて、「力」とはもともと、イコール「権力」ではない。単純化する危険を承知であえて指摘するならば、むしろそれを、「近代」「西洋」「男性」的規範が、「他人を動かす力」「他人を支配する力」に切り縮めてしまったのではないか。そうして、「権力としての力」すなわち、軍事力や政治力や経済力の「限界」というものが見えてきたいま、「権力」よりもむしろそうした「内なる力」をどう鍛えるかが重要なことになりつつあるのだとも思う。たとえば、経済力や政治力や文化の権力などをもたない女たちは、「権力」に直接アクセスすることはできないかもしれないが、「内面の力」はもっている。どんな「弱者」も力をもっている。むしろ、「自分の中の力」を発達させて、自分を支えることなしには生きてゆけない女たちは、特権や保護に守られている女たちよりも「内面の

力」を発達させていることがある。それは「生きぬく」ことから生まれる力といつていい。「弱者の力」の究極は、他人を支配する権力のちょうど反対側にあつて、支配を「拒否する力」「信じない力」である。強者が押ししつけてくる考えや自分への定義づけを拒否し、自分で定義し直す力。表向き従うふりをしてさえ、心の中では信じないことができる。それは「弱者」の最後の抵抗の砦。

「権力としての力」に比べて一見無力に見えるが、こうした「内なる力」を本当に引き出すことが、フェミニズムがかかげた「エンパワメント」のいちばんの核心部分なのだろう。そうした「内なる力」を育んできた女たちにとつて今重要なことは、「権力」を手にするのではなくかえにそうした「内なる力」を放棄することではないはずだ。

「権力としての力」と「内面の力」——わたしたちは、ここでもまた、「大切なのは権力なのか、内面の力なのか」といった二元論に陥るのでなく、「権力と上手につきあいながら、いかに内面の力を育てるか」「内面の力を育てることで、いかに他人に影響を与えられるか」を考えてゆきたい。そこにこそ、女たちのチャレンジがある。

英会話と、仕事と、人生

石原 みき子

(環境とフェミニズムの英会話寺子屋 主宰)

●英語力をつけて仕事をすることについて

英語が好きだから、得意だから英語を使う分野で活躍したいと言う人がたくさんいます。どうやら「しっかりとした英語の力があれば仕事ができるのだ」という誤解があるようですが、どちらの言葉もしゃべれるし、読み書きができるという、それだけで仕事ができるのでしょうか？

例えば英語で話し出すと、素晴らしくなめらかに、しかし要点の定まらないつまらん話をえんえんと続ける人がいます。これは、「よどみなく話せなくてはならない」という英語力競争における強迫観念のなせるわざだと思います。かと思うと、非常に正確な文法と多くの語彙を駆使するのですが、感情のこもらない棒読みのような話

し方をする人もいます。頭の中でまず英作文をして、それを読んでいるのです。これも「正しい英語でなければ」という強迫観念だろうと思います。かなり英語が「できる」人たちなのですが、共通しているのは、会話しているつもりなのに、「相手が見えていない」こと。言葉の第一義の目的は何かを伝えることですが、相手の存在が見えないと、いくら正しくよどみなく語っても伝わらないのです。まして、伝える中味より、伝える方法のほうにばかり意識がいつてしまっているようでは。

翻訳や通訳という仕事ですら、同じことが言えます。読者や聴衆のことが見えていないと、仕事の量をこなすために機械翻訳された文章のように、日本語ではあるがよく意味の通らない、あるいは前後関係からして不自然な訳をしてごまかす事を役立つ技術として取り込んでし

まったりします。そして、そうなるのは「英語の力が足りないから」だけではないことには、なかなか気づけません。

言葉というのはコミュニケーションの道具にすぎません。コミュニケーションに必要なのは、ひとりよがりにならず相手の存在を意識し尊重することができ、「場の空気」を把握する想像力です。そして他者を理解するためには、まず自分を知ること。自分を後まわしにしないで、大切にすること。自分を人間関係の中で最大限に活かすことです。それには、自分に対する信頼と自信が必要です。どうすれば自分に自信が持てるのでしょうか？自信を持ちたい人の多くが、地位や学歴、資格を得ようとしています。英語に関してもさまざま資格試験があります。そういう「何かのお墨付き」が自分に自信をくれると思いがちです。でもそれらはトータルな自分に対するものではなく、「自分の持つ能力の一つが、ある一時点で到達した水準を示す」だけにすぎません。私の言いたい「自信」とは絶対的自信。誰とも比べられない絶対的存在であるあなたに対する信頼と自信です。それが、同じように誰とも比べられない絶対的存在である他者の存在に対する想像力を育ててくれます。

●仕事と人生

どうも私たちは、仕事で収入を得てはじめて一人前、人生を楽しむのはその収入によるのだから、何よりも仕事優先で当然と思っているようです。

収入の高い仕事は往々にして忙しく、高いストレスを伴うもの。そうすると仕事以外の時間、そしてせっかくの収入も第一義にストレス解消に使われる事になります。そうやって身体と精神を癒し、またがんがん仕事をするのなら、仕事だけが人生ということになってしまいます。とても好きで、楽しい仕事なら良いけれど、「嫌だ、嫌だ」と仕事の愚痴を言う人の多いこと！

仕事は人生の大切な一部だけれど、全部ではないし、上位に来るものでもない。収入を伴わなければ仕事とは言えないという考え方にも疑問があります。仕事には収入以外の報酬、社会の一員であり、社会に貢献しているという手ごたえと、誰かの役に立っているという喜びがあるからです。これらを得られていたら、ストレスは軽減されて健康でいられるから医療費が少なくてすむし、ストレス解消のための無駄なお金を使わないですみます。それなら、収入が低くても差し引き同じ。いや、人生を楽しむためののなら、こちらの方が勝りますね。

ただし、「収入が少ないこと自体を、あなたがストレスと感じないでいられれば」です。これがなかなか難しいのですけれど。稼ぎというものが人間の価値を測るものだという考えを、幾分かでも取り込んでしまっている現実には不自由です。お金で測れない価値というものはあなたも存在していないかのようにです。かわりにお金の価値は不適當に高すぎます。

●「環境とフェミニズムの英会話寺子屋」とは

今年で十年目を迎える「英会話寺子屋」は英会話教室ではあるのですが、英語は手段に過ぎず、大事なのは語る中味です。今世界で起こっていることを環境とフェミニズムの視点で考えあうことを通して、人と人をつなぐ仕事を私はやりたかったのです。

だから「英会話」は実はおまけなのですが、中味が濃いので言いたいことも深まり、四苦八苦している内に上達するということになっています。これは英会話初心者として同じことです。語彙がどんなに少なくても、伝える中味のある人は、ほとぼり出る思いがあるのです。だから、言いたいことから始めるといのが寺子屋のやり方。場面設定しての会話練習なんて、まるでハンバーガ

ーショップのマニアルみたいではないですか。そんな場面は一生の内何回訪れると言うのでしょうか？

寺子屋のチラシで『英語コンプレックスからの解放のために』というタイトルで7つの覚え書きを紹介しています。英会話にかこつけていますが、英会話には限らずあなたの人生を輝かせるためのヒントだと思っています。英会話なんて、人生のおまけに過ぎませんから。

※ ※ ※

1、あなたの話す内容は、あなただけのものです。

何かを語る時には、湧いてくる感情を込めて私たちは表現しています。あなたの言いたいことを、他の人に一〇〇%肩代わりしてもらうことは不可能です。あなたが言うのです。

2、あなたは自分を充分表現できます。

コミュニケーションのうちの、七〇%を表情、声のトーン、しぐさが受け持ちます。言葉の占める割合は三〇%以下です！ コミュニケートしたい相手に対して、オープンな気持ちで接してみてください。あなたの気持ちが伝わります。

3、間違えることは素晴らしい！

間違ふことを楽しみましょう。堂々と間違えて、それを隠そうとしないと決心してみてください。「まちが

えちゃった」と言つてOK。誰もが間違えながら学ぶのです。たくさん間違える人はたくさん学び、うんと得をします。

4、「わからない」と表明し、説明を求めるのは、賢い人の権利の行使です。

もちろん、「わからない」と言つていいのです。「わかつたフリ」をするのが、もっとも話し手に対して失礼です。たとえ自分以外の全ての人が解っているように見えても、他ならぬあなたが解らないのなら、話し手にそう伝えることは話し手の助けとなります。

5、どんな場所も、あなたのものです。
あなたが出席しているのが、国際会議であろうと、海外からのお客さまを招いたパーティであろうと、あなたがそこにいる正当な理由があるのなら、そこはあなたにとって快適な場所ではなくありません。そう思つていいということです。充分リラックスして、自分がこの場に必要であると感じていくください。本当にそうなのだから。

6、思つたことをすぐ言つてみる習慣を身につけましょう。

あなたの思い、考え、意見はもちろん他の人にとつて聴くに値するものです。反対意見もあることでしょ

う。それは、他の意見もあるということに過ぎません。反対されたからつて、あなたの価値が下がるというわけではないのです。まわりの人の顔をまらずうかがうという癖をすてましょう。思つたその時が、言うべき時です。

7、自信過剰になるということはありません。

自信過剰に見えてイヤな人たちがいます。「ああはなりたくはない」とあなたは怖れ、自分に対する正当な評価も受けとれなくなっています。彼等はまだまだ自信が足りないのです、虚勢を這っているのです。人は自分に自信を持つと他の人を怖れさせる必要がないので優しくなります。どうしたら十分な自信を持てるでしょう？ 自分の能力を他の人と比べるのをやめる。これだけです。

英会話寺子屋連絡先：

TEL/FAX 042-576-1297

<http://www.asahi-net.or.jp/~zv6m-ishr/>

「おんな」と「英語」と「仕事」

吉原 令子

— 女は英語でよみがえる

(大学講師)

●英語で飯は食えるのか？

「英語ができたなら仕事はありますか？」と質問されたら、私はいつも「イエス」と答えます。英語で飯は食えます。通訳、翻訳、英語教員（小学校、中／高校、大学、英会話学校など）、語学編集者、外資系企業勤務、海外勤務などなど、数えあげればきりがありません。そして、次によく出てくる質問が「私、日常会話には困らない程度の英語ができるのですが、仕事はあるでしょうか？」これがちよつと曲者。答えは「イエス・アンド・ノー」。

「英語ができる」とはいつたいどういうことでしょうか？ 話せることでしょうか？ 訳せることでしょうか？ あるいは、どの程度話せたら（あるいは、訳せたら）「英語ができる」ということになるのでしょうか？ つまり、「英語ができる」という言葉には大きなワナが

あるのです。ここで、私の失敗談をひとつご披露しましょう。

「吉原令子。アメリカの大学、大学院を修了。専門はアメリカ文化と女性論。TOEFL 607点、TOEIC 910点。日本語、英語によるコミュニケーションはまったく困らない。2002年、お金に目がくらんで某スポーツ大会の通訳兼雑用の仕事に飛びつく。ところが、外国人ディレクターの言っていることが訳せず、大失敗。自分では『英語ができる』と思っていたので、自尊心がズタズタに傷つき、失意のまま東京に戻る。」

なぜ私が大失敗したのかわかりますか？ まず一つは逐次通訳の経験が少なかったこと。もう一つはメディアのこともそのスポーツに関する知識もまったくなかったこと。世の中の人は英語がしゃべれると「英語ができる」

と思っけています。でも、同時通訳、逐次通訳、翻訳、英語によるコミュニケーションがとれるということはまったく違う技能を要するのです。同時通訳をするには同時通訳の訓練を、逐次通訳をするためには逐次通訳の訓練を、翻訳をするためには翻訳の訓練をしなければなりません。これらは「英語が話せる」ということは別の技能なのです。私の場合、逐次通訳の経験がなかったわけではありませんが、とても少なかったことは否めません。

次が一番問題だったのですが、今回の仕事が自分の専門外であったということですが。私は大学院で女性学を専攻しましたから、フェミニズム系の用語や知識は一般の人々よりもよく知っているほうだと思います。しかし、メディアのことはまったく知らないし、スポーツに関する知識もまったくありませんでした。「勉強不足」の一言に尽きるのですが、メディアで使われる用語や言い回しもスポーツで使われる用語も知らなかった私は、外国人ディレクターが言っていることをまったく日本語に訳せなかったのです。単語一つひとつはきちんと聞き取れているのに、日本語にならないのです。その上、メディア関係ですから、秒単位で次から次へと外国人ディレクターから指示が出ます。本当に血の気が引く思いでした。話は「日常会話には困らない程度の英語ができるので

すが、仕事はあるでしょうか？」という質問に対して「イエス・アンド・ノー」という答えに戻りますが、「英語」プラス「○○」があれば「イエス」、「英語」だけならば「ノー」です。TOEIC900点を取ってしようと、通訳ガイドの資格をもっていようと、ただ英語ができるだけではダメなのです。ただ「英語ができる」だけならば、帰国子女がたくさんいます。英語で飯が食いたいならば、「英語」プラス「○○」を身につけることです。「○○」は何でもいいのです。金融、IT、医療、国際会計、女性問題、環境問題、人権問題、自分の興味がある分野を自分の専門にすればよいのです。

●お金をかけない勉強法

さて、自分の専門が決まれば、次は勉強です。私は英会話学校に行くことも個人レッスンを頼むことも否定はしません。過度の期待はしないことです。ネイティブスピーカーだからと言って、何でも英語でわかるわけはありませんし、あなたが選んだ専門のことをよく知っているとも限りません。多くの人が「高いなあ」と思いつつ英会話学校に通って、毎回たわいない茶飲み話のようなことをして帰るといったパターンを繰り返しています。私も留学前に英会話学校に通ったり個人レッスンを

受けたりしましたが、相性のいい先生や、自分と興味や関心の近い人で内容のあるおもしろい話ができることはまれでした。毎回「先週どうした?」「週末どうする?」といったくだらないことしか話せないネイティブスピーカーだと、どうしても不満だらけになってしまいます。しかし、英語をブラッシュアップさせるためには英語を話すことが不可欠です。

そこで、自分の興味や関心をテーマにした英語学習サークルに参加したり、あるいは、自分でつくったらどうでしょうか? いくつか紹介しましょう。

◎Colors of English (渋谷)

女性をとりまく様々な問題を英語で語り合いながら、必要な用語や言い回しを勉強する英語学習サークル。2005年の国連女性会議参加を目指してフェミニズム関連の専門用語を学んでほしいと思います。

(連絡先・吉原令子: rei0225@m17.alpha-net.ne.jp)

◎英会話寺子屋 (国立、中野、横浜)

環境・女性・社会のさまざまな問題に関心をもつてもらう場所として、またそれらの問題を解決するために尽力している人たちが、英語力を身につけ世界会議等で積極的に発言するために学ぶ場所として機能しています。(連絡先・石原みき子: zv6m-ishr@jasahi-

net.ne.jp TEL/FAX 042-576-1297)

◎北坂戸コミュニティ英会話 (北坂戸)

環境問題やさまざまな社会問題をざっくばらんに語る英会話サークル。このサークルを通して環境問題や社会を取り巻く問題に興味をもってもらいたいと思います。(連絡先・菊地恵子: kikuchiki@huac.jp)

◎chic-chat (チック・チャット) (横浜)

「フォーラムよこはま」が主催の、NGOのニューズレターを使って英語を学ぶクラスから始まって、自主学习会として続けて5年になりました。現在の活動は「Feminism is for Everybody, by bell hooks」を使った月1回の定例クラスとゲストスピーカーを招いての月1回(不定期)です。基本的に「フォーラムよこはま」(桜木町)が拠点です。

(連絡先・三浦悦子: ecchan@tc.xdsl.ne.jp)

これらのグループは自主運営をしているので、講習代も安く、話し合うテーマも決まっているので「たわいな茶飲み話」をして不満を抱えながら帰ることはありません。自分の興味や関心とは違うという方はぜひ自分たちで新しいサークルをつくってはどうか。運営方法や講師確保の術を学ぶために1、2度、このような

グループを見学するのもよいと思います。

●「I」(私)を愛することから始めよう!

日本語で「私は」を連発すると「自己主張の強い人」とか「自己中心的な人」と言われてしまいますが、英語では「I」(主語)がないと意味不明の文になってしまいます。「I」(私)でスタートするためには、自分がどんな人間なのか、何を主張したいのかをはっきりとさせなければなりません。そのためには「I」(私)が自分のことをよく知っていて、大切に育んであげることが必要ではないでしょうか。そして、英語は、日本語のように複雑な敬語や謙譲語も性別による言葉の違いもなく、イエス／ノーをはっきりさせないと通じない言語ですから、英語を話しているうちに、日本の社会や文化の「しがらみ」から離れてアサーティブになっている自分にあなとも気づくはずです。英語は、語学の仕事をした女性、これから仕事をやっていく上でスキルの一つとして英語力を身につけておきたいという女性だけではなく、「もっと違った自分になりたい」「自分が生きたいように生きてみよう」という、人生への主体的な働きかけのために役立つにちがいありません。

しかし、一方で、英語のもつ「権力性」に私たちは自

覚的でなければならぬでしょう。標準英語を話す人たちだけが正しいと思わせる(白人が話す英語が「正統な英語」で、日本人やフィリピン人や中国人が話す英語は「正統ではない英語」という考え)ことなど、西欧文化を優位におくような価値観には抵抗していく必要があります。英語はあくまでも「コミュニケーションの道具」にすぎないのです。英語を道具として使う私たちに求められているのは、英語のもつ権力性を十分に意識しながら、世界の女性たちと語り合い、女の体験を共有し、女性同士の連帯(シスターフッド)を築いていくことではないでしょうか。

※

★新刊のご案内! 「やさしい英語でフェミニズム」英語で女性問題を語るためのワンポイント・レッスン」(Colors of Females編

吉原 幸子監修) A5版128頁・定価1260円(本体1200円+税、各章ごとに会話例やエッセイを取り上げ、女性問題を語る

ときによく使われる言葉や表現をわかりやすくまとめています。

◎お申込みは「フェミックス」(TEL: FAX 03-3424-3603)まで。

★「Colors of English」講座のご案内 (5月15日午後7時~9時)

6月7日(金)「セックスワーク」(Sex Work)

6月21日(金) ゲストスピーカー: Kim Hughes 氏

7月5日(金) Mメディアと女性 (Media and Women)

7月16日(火) 「従軍慰安婦」問題 (Sexual Slavery)

7月16日(火) ゲストスピーカー: 朴和美さん

7月16日(火) ゲストスピーカー: 日系アメリカ人女性 を

囲んでワークショップ (パワーシヤフル) を

DVのサポート活動を通して

野口 真理子

(女性と健康北九州ネットワーク)

●はじめに

私は九州の地方都市で、女性の心や身体の相談や電話相談に応じたり、自助グループや講座開催などの活動をしている。

活動を始めるきっかけは、九五年に「戦争と性」というテーマでイベントを行った後に、自宅に性暴力被害の相談電話がかかるようになったことにさかのぼる。突然かかる電話に混乱し、自分の身を守りたいと始めた相談活動であった。地元の女性センターに自分の居場所や仲間を見出すことができなかつた私は、必要に迫られて「女性と健康北九州ネットワーク」というグループをつくることになった。自分のために始めた活動が、結果として、暴力を受けた経験などを持つ女性たちに役立つ

いるということであって、最初からその問題に対して特に深い認識や使命感があつて始めたわけではない。地元の人相談員や地域外の民間女性グループの人たちの協力を得ながら、すべて追いかけるように走りながらつくっていった活動であつた。

●DV防止法施行以降

二〇〇一年十月、「配偶者からの暴力防止及び被害者の保護に関する法律」(DV防止法)が施行される前後から、電話相談を利用する人たちが倍増し、目の回るような忙しさになった。利用者が増えた原因は、法律ができたことでDVに関するテーマをマスコミが取り上げる機会が多くなり、地域に住む女性たちの日常会話の中で

も「ドメスティック・バイオレンス」という言葉が飛び交う程に、DVが関心を持たれるようになったこと。そしてまた、私たちの活動もテレビやラジオ、新聞などで取り上げられることが多くなり、一般に知られるようになったためでもある。

かかってきた電話を取る時は、こちらからは決して、「女性と健康北九州ネットワークです」「相談窓口です」などと名乗らないようにしている。時には電話の明細からこちらの電話番号をキャッチした加害男性から電話がかかり、電話の向こうから泣き叫ぶ女性の声が聞こえてくる時もあるからだ。電話をかけてくる女性の安全のためにも、こちらと連絡をとっていることがわからないように配慮している。

相談内容は、電話で話を聞くだけのものから、何回かの面接で情報提供を行うもの、自助グループによって当事者同士の支え合いをするものまで様々であるが、時には緊急の支援や一時保護が必要なものもあり、地元の人相談員の力を借りることも多い。私たちの住む地域では婦人相談員による運動の成果として、公的福祉施設の中にシェルター機能を持つ部屋があり、DVの緊急一時保護にはそこが使えることになっていて、助かっている。

●当事者を責めない支援を

私たちのサポート活動を利用する人の半数は、年金の不利など経済的な問題を考えてしばらくは家にとどまることを選ぶ。その後離婚した人たちもいるが、「別れた方がいい」「逃げないあなたに問題がある」「自立をした生き方をしなさい」と多くの相談機関で言われ、相談することに精神的苦痛を感じている場合も多い。当事者の女性に対して私たちができることは、彼女の身の安全のために何が出来るかを一緒に考え、たとえ経済的不安などからパートナーの元に戻ったとしても、いつでもまた受け入れる用意があることを伝えながら彼女の自己決定を支えることだろう。

「被害者支援という名称のついたサポート団体を見ると、サポートする人とされる人の格差を感じて蔑まれていると思った」と、話してくれた人がいた。また子どもの問題に取り組むグループが配布した「DVの子どもへの影響」というチラシを読んで「子どもに対してすまない」と不安になって連絡をしてきた女性もいた。

誰だつて人の助けを受けるのではなく、人を助けられる立場にいたいと思うだろう。支援を受ける人が責められたり見下されたと感じるのではないような支援であるよ

うに細心の注意を払いたいと思う。

● サバイバー・サポーター

私たちの活動には、DVや性暴力を受けた経験を持つ当事者も相談員として加わっている。日本ではまだ馴染みのうすい「サバイバー・サポーター」であるが、かつて当事者だった人たちの力の大きさを知っているだけに、彼女たちの言葉を受けとめるだけでなく、その力を最大限に活かしてもらおうと考えている。それは、サバイバー・サポーターが培ってきた自分の身を守るための知恵が、面接相談場所を非公開にするなど、相談窓口を利用する人たちへのプライバシー保護のために役立っているからだ。

とはいえ、サバイバーが支援スタッフとして活躍する欧米とは違って、この分野の講師が未だに、社会的地位の高い専門家たちによって占有されている日本の現実のなかでは、彼女たちの言葉は無視されがちだ。「かつて私も当事者だった」と口にする、同じ支援者同士ですら数歩引かれてしまうと聞いたことがある。自分が当事者であることを隠して支援活動をしているサバイバー・サポーターは決して少なくないだろうと思う。

● DVを受けても地域で生きられるように

私たちが行っている支援は、当事者を支援する身内や友人たちがいて、それをまた支援する地域の人たちや私たちがいて、というふうな幾重にもなった支援のネットワークになっている。

「悪いことを何もしていない私がなぜ逃げないといけないのか。私はこの地域で生きたい」と望む女性を助け、多くの地域の人たちと協力をして支援しようとする人たちを私は何度か見てきた。いつ逃げてもいいように、荷物やお金を預かる職場の人たちがいたり、緊急の時に一部屋を用意する友人がいたり、病院に付き添ってくれる人もいた。みんな専門的訓練を受けたわけでもないし「男女共同参画社会」なんて難しいことはわからないが、一人の友人としてできることを考えたいと協力をしていた。女性たちは離婚までに数年がかかったが、今もその地域で、友人や地域の人たちと共に生きている。そのような地域の支援体制は今後さらに必要になるだろう。

「シェルターだけでなくその後の生活支援が欲しい」というサバイバーの言葉を何度か聞いた。隔離されたシェルターという空間は、いつかはそこから出なければな

らない。シエルターに逃げれば、DVが解決するわけではない。シエルターに逃げた時からすべてがはじまるのだ。一人ひとりの人権が認められていない世帯単位の税制や年金制度、児童扶養手当の削減などの現実のなか、仕事の確保、公的アパートの早期入居など、DV防止のための法律はあってもそれを生かすための周辺の支援体制は依然として不備なままである。

公的な自立支援策の充実や地域での女性の雇用の創出を要求しつつ、DVを受けても地域で生きていける支援ネットワークをつくりたいと私はずっと思っている。

●ボランティアの落とし穴

私の住む地域では、ここ数年「女性に対する暴力」のテーマが脚光を浴び、特にDVをテーマとする女性センターの講座やイベントが以前よりも多くなり、女性政策が、女性センターに集まる中高年の女性のマンパワーを民間シエルターづくりに投入し安上がり福祉を行おうとしているのではないかと思ってしまうくらいに、シエルターづくりに関心が集まっている。そんな中で、私たちの活動もまた、行政の下請けにならない民と官のパートナーシップづくりとは何かと考えるながら活動をしていき

たいし、シエルタースタッフが女性労働の雇用の機会や職種を増やすもの一つになるよう要求していきたい。

私たちにも、「シエルターをつくるなら協力をしたい」という地元の婦人相談員や民間の女性たちからの声がかかることもあるが、現段階では、県の公的シエルターや地元の公的一時保護施設の無料施設を最大限に利用していきたいと思っている。DVの法律が施行された現在、シエルターを設置していくことは、公的機関の義務と考えていい。かつて地元の婦人相談員が「女性センターに一時保護施設を」という要望を出したが叶わなかったが、今後、女性センターにそのような機能をつくることも課題だと思っている。

私たちのホットラインに緊急電話があった場合、普通は地域の福祉事務所にいる婦人相談員を通して、公的シエルターで一時保護をお願いするが、公的機関が休みの時は、婦人相談員へ連絡がつきにくかったりして、保護が難しかったことがあった。お金もなく逃げて来た女性に有料の民間シエルターを紹介するのは難しく、このような時、「公的シエルターにつなぐための一日だけの無料施設があれば」と思うことがある。民間シエルターをつくることは財源と人材を確保するだけでも大変なことであり、決して簡単につくれるものではない。しかし、

公的シェルターをそこにつなぐための緊急対応のみの素泊まり一日宿泊の民間施設であれば、助成金と寄付で比較的たやすくつくれるのではないだろうかと思うし、このような一日だけの施設であれば、「自宅の離れを開放してもよい」と申し出てくれる人も、私の地元には何人かいる。このような緊急対応型一日シェルターの可能性を考えていきたいと思っている。

●女性福祉と女性政策の谷間で

DVの問題が出てきたことで、最近は社会福祉学会では女性福祉分科会もできているが、そもそも教科として該当するものがないために、「女性福祉」は福祉制度や福祉教育の中においても明確に位置づけられるとはいえない。

その原因の一つに、いままで「女性福祉」が一九五六年に「売春防止法」（売防法）に基づいて実施された婦人保護事業の中でしか語られることがなかったという経緯がある。売春をした女性を取り締まり保護するという婦人保護事業のために設置された婦人相談所は、近年はDVなどにより逃げてきた女性たちの駆け込み寺的要素が強くなり、事実上は公的シェルターとして女性のため

の社会福祉資源の役割を担ってきた。しかし、縦割り行政に阻まれて女性の人權を基本に考える「女性福祉」が必要だということを包括的に提起するまでには至っていない。

近年DVは「男女共同参画社会」の中で語られることが多くなり、女性センターでもその取り組みがはじまった。しかし、DVの問題に関わる人たちですら、婦人保護事業について十分な認識を持っていないことがめずらしくない。というよりも、女性政策分野では、売防法に関わることを避けているのではないかと思うことがある。

過去を振り返ってみても、女性たちは、「快楽の性」と「母になる性」という二つの性に分断させられてきた歴史がある。「婦人保護事業」は性産業で働く女性たちを対象としてきたが、「女性政策」はそのような女性たちを排除し「母になる性」を持つ女性たちだけを対象として、DV防止の取り組みを進めようとしているのではないだろうか。現行のDV防止法が、保護命令の申し立てができるのは「配偶者」からの暴力を受けた者（離婚すれば対象外）に限っていることをみても、女性を分断しない女性政策を要求していくことの大切さを痛感している。

アメリカ先住民を訪ねて

佐藤 葉
(フリーライター)

●砂漠へ旅立つ

アメリカ、アリゾナ州の砂漠の奥に、ホピ族が住んでいる。伝統を守る農耕族である。約六千平方キロの保留地は乾ききった土地で、川も湖もおろか、小さな池すらない。七月の太陽光は強く、車の前方の道路がてかてか光って見える。車の後ろには、もうもうと土ほこりが舞い上がる。後部座席では、高校一年生の息子が、窓から入る熱風で少々参りかけ寝そべっていた。真夏の砂漠、それも国道をそれてさらに奥へ行くのは、物好きとしか言いようがないだろう。

日系アメリカ人三世の友人と交代で車を運転する。

「ヨウはどうしてそう危険なところへ行きたいの？」

前年に南米のポリビアへ行き、ある村でうっかり生野菜を食べ、ひどい腹痛と下痢に襲われて一日入院した話をし

たからだ。だが、ポリビアでは危険は感じなかった。むしろ、アメリカ、とくに都市のダウンタウンが怖い。アリゾナ州も場所によっては危険なのだが、先住民の村がそう危険とは思えなかった。

アメリカ先住民の多くは、耕作にも狩猟にも適さない条件の悪い地域に住んでいる。いや、住まわされていると言ったほうがいいだろう。しかし、彼らは今も独自の文化を持ち、その高い精神性は、アクセサリーや焼き物などに描かれた落ち着きと安定感のあるシンブルな幾何学模様から感じとることができる。

この旅を企てる半年前、私は、人間関係のストレスから、うつ病に陥った。はじめの三カ月間は、家族の食事の支度だけですら、気持ち奮い立たせなければできない。人には会いたくないし、話したくない。眠れない。活字人間で

活字を見なければ落ち着かなかったというのに、字を見る
ことがひどく疎ましくて新聞も雑誌も読めない。文章も書
けないし、ようやくひねり出しても、情報を整理できない
からまとまりのある文章にはならない。それ以前に、情報
が頭の中に入ってこないのだ。

その急性(?)のうつ状態が抗うつ剤と精神安定剤で少
しずつおさまって何とか人に会うことができるようになった
頃、私はもつと自然な自分でありたい。今の自分の精神
状態を否定するのではなく、そのままの自分を生きたいと
思い始めた。

なぜか、しきりに、十年前前、アメリカに住んでいたと
きに訪れた砂漠を思い出していた。三百六十度、砂と土く
れが混じりあった波がはてしなく続いている。風を感じな
がらその真ただ中に立って、空を仰ぎ見る。空の青さは、
何もかも吸い込むように深い。自分という存在は、この砂
漠を地球としてみるなら砂の一粒のように小さいこと、し
かしこの砂漠を構成する一員であること、それに大昔から
連続と続いてきた命の流れの中でそれぞれの命が光輝く一
瞬があり、私の命もまたその輝く一瞬の光なのだというこ
となど、大自然の中で、一人の人間の存在の小ささと同時
に確かさを感じたひとときであった。ごつごつした岩が連
なり、まばらに生える灌木がどこまでも続く砂の風景も、

ぼっかり浮かぶ雲も、真つ青な空も、そして人間も、いと
おしかった。

そのような砂漠の中で、自然を観察し、自然とともに生
きる人たちに会えば、きっと私は、体の底に降り積もって
いる疲労感が溶けて安堵を感じるだろう。会って、彼らの
生き方や生活の仕方を、直接聞きたいと思った。

早速私は、ロサンゼルスに住む友人たちに手紙を書いた。
そして、教師をしている日系アメリカ人三世の友人が何人
かに当たって、会ってくれるという先住民を探し出してく
れたのである。

●ホビの人々の生活

国道をそれると灌木はますますまばらになり、感傷のか
けらも感じられないほど乾いた風景が続く。赤茶けた土く
れの中の道を一、二時間も走り、観光客用のセンターに着
くと、入り口には、ヤババイ・カレッジで先住民学を教え
るE・J・サタラが、旧知のようににこやかに立っていた。
目元に笑みをたたえたE・Jは、まず、アリゾナ州の先住
民やホビについて概略を説明してくれた。

アリゾナには二一の部族がいるが、その中のひとつであ
るホビ族の保留地には村が十二あり、約一万人が住んでい
る。そのホビ族の保留地は、ナバホ族の保留地の中にある。

当初はホビ族の土地の方が大きかったのだが、次第にナバホが土地を獲得してきたので、一九九二年に協定を結び、ホビ族の土地を侵害せず、ともによき隣人として暮すことを確認しあつたという。

彼の父親の家へ案内してくれるというE・Jの車のあとから、茶色の土の丘を走る。茶色の土壁の、小さな家々がだんだん増えてくる。車のわだちのあとがへこんでいる道路を右へ左へうねって少し走ると、車は止まった。私の背丈と同じぐらいの少しやせぎみの男性が、土壁の家の奥からゆっくり出てきた。E・Jの父は私たちの突然の訪問にも驚いた様子はなく、家の中に招き入れると、白い壁際にある小さな椅子に腰かけ、話し始めた。

ホビの人々にとって大事なものに「克蘭」(自分たちのルーツを表すもの)とダンスがある。克蘭は蝶の家系、カラスの家系などというように、昆虫や動物、あるいは彼らにとって大切な作物であるとうもろこしや豆類、瓜類などの植物などで表される。

ダンスは彼らの信仰を表すもので、スピリッツ(聖霊)を表したカチーナという面をつけて踊るのだが、その種類の多さは特筆に値する。母なる大地の幸いを祈るダンスは、彼らの大地への特別な思いを表現している。雨を呼ぶダンスもある。穏やかに語るE・Jの父は雨の話の時に憂い顔

になつた。最近では雨が少なくなつて、どんどん乾き、このままでは作物が取れなくなるからだ。

E・Jの父の話は、大地のことから地球全体のことまで広がる。地球全体に何が起つていいのか、今後、何が起るのか……。ホビの人々は、自分たちの村のことだけでなく、地球全体のことに関心を持っている。物質的に豊かなアメリカ社会の中にあつて質素な生活をし、そこには彼らの信念や信仰が流れている。E・Jも彼の父親も、ゆつたりした時間の中を生きていように見える。

一九四〇年代、アメリカは先住民に対して同化政策を行ない、E・Jの父は寄宿学校に入れられ、英語でアメリカの歴史を教わつた。厳しい時代だつた。壁や部屋の小さなテーブルの上に飾られている写真の中の一枚に、E・Jの父が学校の制服を着て緊張した顔で写つていた。E・Jの時代には寄宿学校はなくなり、現在、子どもたちは村にある公立学校に通っている。だが学校では英語で各教科を教えているので、家庭でホビ語を子どもたちに教え、ホビの言葉を継承しようとしているとのことだ。

E・J自身、母親が語るたくさんのお話や先住民の歌を聞きながら育つた。動物を主人公にした物語はのどかで、歌いながら話を聞かせる母の姿と楽しそうに聞く子の顔が浮かんでくる。

やがて村に入ってきたラジオでE・Jは異なる音楽を知り、ハーモニカを吹いたりギターをかき鳴らした。村を出てカレッジで教授法を学んだあと、卒業後はしばらくロサンゼルスで働いたが、働いている時に知り合った他の先住民に他の部族の歌を教わった。この頃の多くの人との関わりの中で、自分のルーツやアイデンティティが明確になったのであるとか、村に戻った今、カレッジで教えるかたわら農業もする彼は、先住民の歌や音楽を知ってもらおうと、学校などでワークシヨップを開き、現在も精力的に活動している。

伝統を守り、文化を育てている村だが、保留地内には仕事がない。だから若い人たちは街へ働きに出て行くが、半数はまた村に戻ってくるそうだ。「遠くへ行く人は、村のこと、先住民のことをその地で話し、村へ帰ってきて、かの地で見たことを村の人に話す」とE・Jの父は言う。

ナバホ族の保留地を通る時、カジノをいくつか見かけた。カリフォルニアの先住民も、カジノを始めたそうだ。十年前にはネバダ州など限られた地域でしか許可がおりなかったカジノだが、今後、先住民の事業になるのだろうか。私は少し憂鬱な気分になっていた。だが、ホピの村にはカジノはない。「私たちはキャンブルはやらない。私たちは作物を得るために働くのであって、金のためではない」と

E・Jの父は言う。彼の言葉はシンプルだが力強く、私はほっとした。

●「すべての命は神聖なものだ」

アリゾナへ出かける前に、アメリカ・インディアン・ムーブメント(AIM)の存在を知った私は、その創始者の一人であるアニシナベ族のデニス・バンクスに、彼らの活動についてインタビューしたい旨をファックスで送った。デニスのオフィスはアメリカの東海岸寄りだったので、アリゾナに着いた時にいくら電話をしても出ない。あきらめて旅を続けたのだが、私の帰国後、デニスが日本を訪れることになり、私は早速、私立の中・高校で生徒たち対象に行なわれたデニスのワークシヨップに参加した。

デニスは、ワークシヨップの初めに生徒たちに先住民の考え方を話す。先住民たちは集まるときによく輪になるのだが、それは命はつながっていて終わりがいいことをそのつど思い起こすためである。

祖先から受け継いだ自分の命は、子、孫、その子どもへとつながり、自然もまた私たちとつながっている。地球は母であり、月は祖母、空は父親、太陽は長兄、岩や石は老教師として、木々は兄弟姉妹、動物は親族、鳥は親類とし

て敬われ、小さな虫も例外ではない。このような考え方が、人間と、森や水や生き物たちが調和して共存する生き方を生み出す。自分たちの子や孫、その七代先のことを考えて今使うものや使う量を考えるのだ。

歌と太鼓に合わせてダンスが始まった。穏やかな太鼓の音色とリズムに、足踏みするようなゆっくりとしたダンスである。歌いながらゆっくり踊ると、体がほぐれていく。

その歌の抑揚や太鼓のリズムが、私の中で呼応し始め、体の中をゆったり循環して行くのを感じる。デニスは生徒たちに話し終えると、三キロメートルのセイクレッド・ラン（聖なるランニング）の準備を始めた。

母なる大地をゆっくり走りながら、母たちのこと、先祖のことを思い、祈る。アメリカの大地を走るときは、走っている時に見たものや聞いたことを、帰ってから人々に伝えることも役目だそう。どのような人たちに会ったか、空の色や木々の様子など周りの風景はどうであったか、どんな動物たちに会い、その様子はどうか。デニスは「私はただ通り過ぎるだけだよ」と語りかけながら走るから、動物たちは走る人に危害は加えないと言うのだ。デニスは、こうしたセイクレッド・ランを、平和を祈りながら世界の各地で行っている。

デニスが起こしたA I Mは、アメリカ先住民に対する意

識の変革を求めるものとして、ミネアポリスで一九六八年に始まった運動である。今まで政府と先住民の間で交わされたが、実際には守られてこなかった三百七十の条約の履行を求め、一九七三年二月には、サウス・ダコタ州のウンデッド・ニー村を七十日間占拠した。占拠した先住民や支援者は六百人ほどで、小銃や鹿狩り用のライフルが主だったのに対し、政府側は戦車、自動小銃、機関銃、それに戦闘機まで投入した。全米のマスコミは続々と押しかけた。

先住民たちは、全国ネット枠のテレビで「もう、白人になろうとしてもがくのはやめよう、私たちとともにインディアンとして生きる道を歩き始めよう」と訴えた。彼らは、アメリカにもともと住んでいた人々として、移住者の国アメリカに同化するのではなく、本来の生き方をしたいと思っているのだ。

A I Mは現在、聖地を守る闘いの支援を行っている。石炭会社も政府も、ホピとナバホの保留地にある聖地ビッグ・マウンテン（石炭鉱脈）を売るよう、現在、彼らに働きかけている。だが、先住民にとって大地は母であり、個人の所有物ではなく、必要に応じて耕作する神聖なものである。その神聖な大地を、掘り返したり切ったり売ったりすることはできない。政府との闘いは闘い方を知っているから難しくはないが、人々に立ち上がってもらおうのが難し

いと、デニスに語る。彼は若いころ、日本山妙法寺の僧侶、藤井日達上人と出会い、非暴力の闘いを知ったのである。

AIMは先住民の文化を守り伝えるために、「サバイバル・スクール」という、先住民の教師が部族の言葉で教える学校の建設や、保留地内の公立学校に先住民の教師を配置することを働きかけている。子どもの頃、寄宿学校へ半強制的に送られ、英語と白人の歴史を学ばされ、気づいた時は、懐かしい昔話も部族の言葉も忘れ、自分の先住民としてのアイデンティティを失いかけていたという体験を持つデニスは、学校や大学を作り、教師を選ぶだけでなく、病院を建て先住民の医者を持ち雇用の機会均等の諸権利を守ることもめざしている。

●サンダンス

ホピの村からロサンゼルスへの帰路、友人はロサンゼルスに住む日系人夫妻のミサコとモウゾウに連絡を取ってくれた。彼らは、サンダンスという、七月に行われる、部族を超えた大きな儀式に、サポーターとして、毎年、幼い子どもを連れて参加している。

サンダンスは、二百人ぐらいの先住民が集まり、四日間の断食をする。ダンサーたちは、だ円形の広場の東から出入りし、まん中に立てたコットン・ツリーを囲んで太陽の

方を向いて、大地を踏みしめるようにゆつたりと踊る。サポーターたちはダンサーたちの周りに立ち、「気」を集めてダンサーに流れるようにする。

広場の西には、柳の枝を細かく編み、それにブランケットをかけたスウェット・ロτζジが並ぶ。中には熱く焼けた石があり、時々その石に水をかけるので、中はサウナのようになる。ダンサーたちは一日に朝と夕方、ここに入って一、二時間祈り、歌を歌ったり自分の気持ちを吐露し、たばこを詰めたパイプをまわす。タバコは生命のシンボルであり、儀式の時に用いるものだ。E・Jの父が見せてくれたタバコは、花の香りがした。

ミサコはスウェット・ロτζジに入った時の経験を話す。「中にはメディスンマンがいて、鳥のスピリッツを呼ぶメディスンマンの時は、本当にあたりでバタバタという鳥が飛ぶ音がしたし、光のスピリッツの時には、チカチカと強い光がフラッシュのようにロτζジの中を駆け巡ったの」

スピリッツを呼ぶ時は助けを請いたい時や、意見を聞きたい時だ。全員に見える時もあるし、限られた人しか見えないこともあるそうだ。

スウェット・ロτζジはもとはそれぞれの部族内で行われていたのだが、アメリカ政府が先住民に対する同化政策を行ったときに伝統的な生活や習慣を禁じたため、先住民た

ちは、自分たちの伝統や文化、アイデンティティを取り戻すためにサンダンスの儀式を行い、スウェット・ロッジも始めた。AIMのメンバーも習いに来たそうだし、現在はメキシコ系アメリカ人やアジア人も参加しているという。

●アジアン・ムーブメント

ここ数年、日系の一世、二世、三世の人たちにインタビュウをしてきた。日系の人たちが日本をどう見ているのか、自分の人生やアイデンティティをどう受け止めているのかを知りたかったのだ。

おしなべて二世たちは日本人であるという意識が強いが、二世、三世は「在日日本人」とは違う生活習慣や意識を持っている。が、それと同時に、日本というルーツを多かれ少なかれ意識する時があるようだ。モウゾウは、精神文化を日本からは得られないとわかった時にアメリカ先住民にそれを求め、それを核として日系人の力強い文化を世界に向けて発信したいと考えている。

「日系一世はもう亡くなった人が多くて精神や文化を学べないし、今の日本からは精神文化は学べない。でも、アメリカ先住民は日本人とルーツが近いし、彼らのスピリットや、伝統を取り戻す運動から得るものはたくさんある。それを学んでアジアン・スウェット・ロッジを始めたいん

だ」と彼は語る。

アメリカ先住民たちは、まわりと調和して生きている人たちだから、この国の自然も、この地での生き方やスピリチュアルなものもたくさん知っているし、持ってもいる。日系人たちもまた、移住者として生活してきたが、先住民のスウェット・ロッジを経験して先住民の考え方や哲学を得ることによって、この土地に根ざした人間になることができるだろうとモウゾウは考えている。そして、先住民の哲学を元に世界発信するアジアン・ムーブメントを起したいと言う。

アジアン・ムーブメントとは、グローバル化に反対し、平等を追求する運動でもある。労働者や平和運動家や白人も巻き込み、アジア人、黒人、先住民など人種、民族、階層、性別を問わないあらゆる人々の多様性を尊重し、社会的平等を求めるものとして進めていきたいと思っている。先住民が七代先のことを考えているように、今起こす運動は自分たちの世代だけのためではなく、次の何世代もの人たちのためなのだともウゾウはきっぱり言う。

マイノリティが増えつつあるアメリカで、多様な文化的背景を持つ人々が手をつなぐこの運動が、やがてアメリカに変化をもたらすのではないだろうか。モウゾウの確信に満ちた言葉に、私の気持ちは明るくなっていた。

相反するもののあいだでバランスをとって生きる

—アメリカ先住民の知恵に学ぶ

稲邑 恭子

(フエミックス)

今月号は「力の再定義」をテーマに、〈支配することもされることもない関係〉をつくっていくのにはどうしたらいいのかについて考えてきた。そのなかで浮かんできたイメージの一つにアメリカ先住民の文化がある。

※ ※ ※

一年前、NHKの『未来潮流』で数年前に見たことのあるアメリカ先住民のセラピスト、レスリー・グレイのワークシヨップに行った。茶目つ気たっぷりでとにかくよく笑い、日本人はちっとも笑わないと少し物

足りなそう。彼女にとって笑いのないきまじめな雰囲気のある〈場〉は居心地が悪いのだろう。

先住民はどんな神聖な厳粛な儀式をするときでも、厳粛のままには終わらせない。〈道化(トリックスター)〉が暗躍し、いつも何かおちこわしていなければ収まらない。コヨーテは先住民にとってトリックスターの象徴。コヨーテが登場すると、必ずいたずらをして何かをやらかすという。

アメリカ先住民の人たちは、白人がキリスト教を持ち込んだとき、相

手がただひとつの神しか許さないことを知らずに、自分たちの神様のなかに、新しい神様がもうひとつ仲間入りしたと喜んだ。西洋文明は良いことと悪いことを峻別し、悪を殲滅しようとするけれど(悪い箇所を切除する西洋医学のように)、先住民の人たちは「悪」を根絶やしにしようなどとは思わずに、バランスが取れば(悪が善を凌駕しなければ)それはそれでよしとする。でも、その結果、寛容な彼らの文化は白人と彼らもたらしたキリスト教によって「邪悪なもの」と目され、徹底的に弾圧されたのだった。

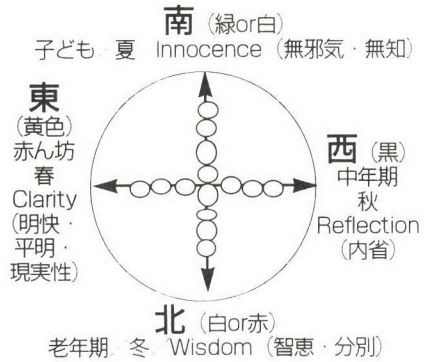
彼女のワークでは原因探しや分析はしない。なぜなら原因探しや分析にいくら時間を使つてたからといって、目標である「よりよき状態の実現」が達成されるわけではないからという(これはとてもよく分かる。因果律の究明が苦手な日本では、あ

らゆる社会問題へのアプローチが原因探してエネルギーを使い果たし頓挫していると感ずるから。

各自持ち寄った小石を並べて、車輪のような円（メディスン・ウィール）を描いた（下図参照）。

円は循環し、東西南北と上下の六つの方向をもつという。東（黄色）は赤ん坊／春／Clarity（明快・平明・現実性）を表す。南（緑or赤）は子ども／夏／Innocence（無邪気・無知）を表す。西（黒or白）は中年期／秋／Reflection（内省）を表す。北（白）は老年期／冬／Wisdom（智慧・分別）を表す。（色や東西南北の意味づけは部族によって多少の違いがあるという。）

東と西、北と南はそれぞれ補完・対立関係にある。つまり、平明で明快であるということは内省的な深みを持たないことであり、内省的深み



※小石を適当に十字に並べて置き、直径1~2mほどの仮想の円を描いた。

を持つということは明快さや現実性に欠けるということ。無邪気ということは無知と隣合わせだが、分別がありすぎると天真爛漫にたのしめなくなるなど、長所と短所がコインの裏表のようでお互いを補い合う。

各々自分で問いを立て（問いをしつかり立てなければ答えは出ないという）、東西南北のうち自分にいちばんぴったりの場所に立ち、ドラマ

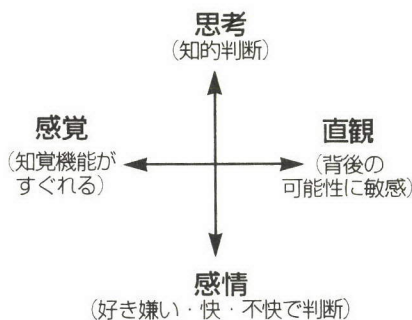
の音がとぎれたら次の所に時計回りに移動し、それぞれの場からもらった四つの答えを統合して自分の答えを出すように言われる。

東に立つとすっきり決然とした感じになった。南に立つと、いたずらっ子のような躍動する感じが下からつきあげてきた。西に立つと体全体が川か湖の流れのように感じる。北に立つと重心が下に行ってしっかりと根を張った落ち着いた身体感覚がする。

場所によって自分の身体感覚が変化することに驚き、自分のなかには普段意識しない相反するいくつもの力が共存すること、メディスンウィールを回して四つの力を統合して使うことが大事なのだ実感する。

またこの四つの資質の対比「ClarityとReflection」「WisdomとInnocence」は、「ユングのタイプ論に出てくる「感覚と直観」、「思考と感

情」の関係とよく似ているのが興味深い。



※ ※ ※
先住民の人たちの知恵を集めた本も紹介したい。

ポーラ・アンダーウッドの『知恵の三つ編み』(徳間書店) は彼女が三歳前から父親に口承で伝授されたイロコイ族に伝わる三つの物語と学習法を収めている。

この本が刮目に値するのはアメリカ

カ先住民の知恵を西欧文明に対抗させて主張しているのではないこと。左足で立つて先住民のやりかたで答え(右脳/直観/全体性)、右足で立つて西欧人のやりかたで答え(左脳/論理/因果律)、最後に両足で立つて世界がどう見えるか答えてごらんと聞かれて育った彼女が残したものは、二つの正反対の見え方あいだでバランスをとって歩く方法だった。

論理と直観の、西と東のやりかたのあいだで、物事をシンプルに現実的にみることと複雑に内省的に見ることのあいだで、あるいは老成した賢者の知恵と子どもいきいきした好奇心とのあいだでバランスをとる……それぞれ相反するもののあいだでバランスをとって歩く生き方は今の私にとってもいちばん気持ちがいい。

『風のささやきを聴け』(チーフ・

ジエームズ、めるくまーる) はアメリカやカナダの先住民の人たちのことばを集めた珠玉のインタビュー集である。

祖父母や父母の温かい庇護に包まれて、幸せな子ども時代を送った人もいるが、過酷な環境で虐待を体験した人もいる。それでも、多くの人たちがスウェットロジャやダンスや太鼓などの祖先の文化や儀式に出会うことで先住民だという自分のルーツとアイデンティティを確認し、再生を遂げ、誇りを持って生きるようになるエピソードは示唆に満ちている。

私たちは再生するためのルーツをどこに求めていけばいいのだろうか。

新・オホーツクの潮風荒く

江口凡太郎

北海道滝上高等学校 家庭科

振り返ると、教員生活もなんと12年目に入っています。今のクラスは2回目の担任です。子どもたちから「おやじ」扱いされても気にならずにいたのが、「毛がまじ、やばいよっ」と頭の毛が少々減少気味なのを指摘されては気になりました。今日この頃。

先日久しぶりに、最初の担任していた卒業生に会うとなぜか、「〇〇の時、怒ってたよね」という話題になるので。そんなに怒ってばかりいた訳ではけつてなく、むしろ、ほめて過してきたのですが、たまに本気で怒ったことが記憶に残るようです。みなさん、高校時代の担任にどんなイメージが残っていますか？

「思い出せない」「存在にはなりたく

ないです。せめて、人生の「反面教師」にでもなればいいわけです。

そう考えると、今のクラスはどつな
るのか？ 全体に、本気で怒ったこと
はありません。表面的な、「問題」の
たぐいがほとんどなく、魂のぶつかり
みたいなものがあまりない感じです。

1年が過ぎ、残り2年もこのまま終
わってしまえばいいんですけど…。

そこで、思いつきですが、クラスで
絵本を読むことにしました。今までも
授業の中で、何冊か紹介はしていまし
たが、時間をつくり読み続けてみよう
と思つのです。

フォーラム北海道大会で実行委員を
ひきつけてくれた石川晋さんは、中学
生に絵本を読んでいると話していまし
た。彼のように、詳しい知識はありま
せんが、自分の感覚と勢いで読んでい
くことにしました。

最初は、「なんで？ 今さら」とい
う感じでしたが、何冊か読んでいくう
ちに、「授業よりました」と聞くまで、

寝る子が分かれるようになりました。

そして、満を持して『じくくのそつ
べい』（田島征彦作 童心社）を投
入！ 思惑通り全員が、集中して緊張
感のある時間を過ごしました。集中し
た高校2年生の目はキラキラというよ
り、ギラギラという感じでした。でも、
とてもいい表情でした。毎日授業して
いても、めったに見ることのできない
表情です。絵本はすごいですね。

さて、それにしてもすんなり、絵本
の世界に入った（戻った）のは訳があ
るように思います。クラスの多数を占
める地元町内生は、小学生くらいまで、
絵本に関して充実した環境で過ごして
いるのです。熱心に読み聞かせ活動を
している方が同級生の保護者にいたこ
とも関係がありそう。「〇〇ちゃん
のおばさんが読んでた」という話が出
てきます。

「絵本？ そーいや、高校でボンモ
読んでたよなあ」「べらういにならばい
いかなあ…」。

曲がり角の家庭科⑬

新しい時代に向けて(5)

梶原 公子

●「家庭科教師」論

前回は、家庭科という教科は大変イデオロギッシュで特異な教科であるということについて述べた。今回は、その特異な教科を担当する家庭科教員という存在を「家庭科教師と主婦との共通項」という観点から論じていきたいと思う。それは、家庭科教師も主婦もともに、戦後日本の女性役割のひとつの象徴であり、片や学校において、片や家庭において、それぞれシャドウワークを担ってきたという点を前提としている。まずは私自身が家庭科教員をやっている、「私のやっている仕事」って学校における『主婦』なんだあ』と思うことがしばしばあった、そのよ

うな体験のいくつかを挙げてみよう。

10数年前のことになるが、ある学校に転勤したばかりのときのことだ。4月はじめの教科会で「今年度の調理実習では、生徒の作った料理を、担任教師に『提出』させるかどうか」という議案があつて、大変面食らつたことがある。これって、家庭の主婦が作った料理を「あなたおいしい？」と聞きながら、一家の「主人」に食べてもらうのとおなじ構図だ、と内心思いつつ「大反対」したのである。しかし、別の教員は、たぶん「大賛成」だったのだと思う。毎回、調理実習で作った「作品」をお盆に載せ、そのクラスの担任教師に「提出」させ、先生が食べ終わつた後は丁寧に食器を下げさせる

「指導」を行っていた。

家庭科も学期末には「評価」をしなくてはならない。「評価」で最も公平なのはなんといっても客観テストだから、試験問題を作成して実施する。そして、そのあとは採点し、生徒に返す。そのとき、生徒は他の教科と同様に「平均点は何点?」「最高点は何点?」という質問をする。それで、平均点と最高点とその得点者を公表するのだが、テストの最高点を取つた生徒に対する、他の生徒のお決まりのリアクションは「わあ、いいお嫁さんになれる」である。

調理実習の際、生徒たちを前に、魚の下ろし方だとか飾り切り方のデモンストラーションをすることがある。

実は私は食物学科学科の出身であるのにもかかわらず、料理よりも洗濯、洗濯よりも掃除が好きだ。ということは、毎日料理するよりも、毎日洗濯や掃除をするほうが好きな方で、早い話が「料理好き」とはいいがたい。しかし、仕事だから、生徒を前にデモンストレーションをする。たいしたワザではないが、カツラむきとか、サバの3枚おろしなどをやって見せる。すると生徒のリアクションは、これまたワンパターンで「わあすごい、さすが主婦」である。

また、お昼にカップラーメンなどを食べていると「センセイ、家庭科の先生でしょ。自分でお弁当作らないの」と言われるし、もつとずうずうしい子は「先生、家庭科の先生でしょ。キーキ作ってよ」というものもある。さらに、次のような話を聞いた方は多いと思う。小規模な中学などで家庭科の専任教師がいないうち、英語や国語担当の「女性教員」が、家庭科も兼任で担当

しているというものだ。この際肝心なことは、兼任するのは必ず「女性教員」であり、間違っても男性教員ではないという点である。

これらの例を挙げると、家庭科教員だって、他の教員と同様により多様な業務をこなし、授業の際も専門的な知識を駆使しているという反論があると思う。もちろんその通りである。しかし、私がここで示したいことは、家庭科教師自身が自分の仕事にどのような誇りを持ち、どのような思いでやっているのかということではなく、他者が一般的に家庭科教員をどのような存在であると認識しているのか、ということである。私の家庭科教員としての経験からすると、一般的に家庭科というのは、「大人の女性なら誰でもできる」教科であり、したがって高度な技術や知識は不要で、体系だった専門的な学問とは言えないものであるという認識ではないだろうか。女性なら誰でもできるというのは、主婦は女性であ

り、女性はすべて主婦になるのだから、家庭科はその主婦になるための勉強であるという構図である。主婦の仕事は家事、育児であり、これはアンケートワークであって、賃金労働を支えるための二義的な仕事である。家庭で賃金労働を担当し、一家の生計を支える男性が主たる仕事をしているのに対して、主婦の家事労働は「徒」であり、「副」である。したがって学校における家庭科も、マイナーな存在で、教科のヒエラルキーとしては英語や国語、数学が上位で、次に理科、社会が来て、その後体育、芸術で、家庭科は最下位に位置する、というものだ。

●主婦が持ち上げられるわけ

時々、生徒を対象に、「学校の教科の中で、将来役に立つ教科はどれだと思いますか」というアンケートが行われる。そのとき必ずといってよいほど家庭科は上位にランクされる。ある

進学塾で行ったアンケートによると、1位が英語、家庭科は堂々の2位だったという。「役に立つ」というレベルで言うと、数学や理科は下位に転落するのだ。このようなアンケートを見ると、多くの人は「やっぱり家庭科って大事だよ」と、その存在を高く評価していてくれることがわかる。そして家庭科教師は内心ほっとしたりする。

しかし、私はこの類のアンケートは額面通り受け取ってはいけないと思っ
ている。なぜなら「家庭科ってやっぱり大事だよ」という賛辞は、「主婦ってやっぱり必要だよ」というのと同義語だと解釈しなくてはならないからだ。主婦という存在は、家庭では家計を支える労働をする人の下位に置かれて
いるのにもかかわらず、毎日の食事を作ったりする時点になると、急に地位が上がり、持ち上げられる。家庭科の教員もまったく同様で、学校ではマイナーな存在で軽視されているの

にもかかわらず、家事、育児を担う将来の主婦を養成してくれる教科であるということになると、とたんに「大事な教科だよ」と。だって将来の主婦を育ててくれるのだから」という高い評価を与えられるからだ。

今回の指導要領の改訂で、家庭科はこれまでにはなかった2単位の科目「家庭基礎」が導入され、多くの学校ではこちらを選択する方向に追い込まれつつあるという。しかし、実は「追い込まれつつある」のではなく、家庭科は2単位の減単するようにはあらかじめ決められていたから、予定調和的に「家庭基礎」という科目が設定された、と私は考えている。つまり、週休2日

になり、「情報」が必修になり、「総合的な学習」もやるのだから、家庭科は4単位はいらぬというわけだ。けれども、決してなくなるということはない教科だと思ふ。なぜかといえば、家庭で主婦がいなくなつては困るからである。家庭科は、家事、育児について

教え、将来の主婦を養成する教科であるから、主婦の存在によつて恩恵を被る側からすれば、いてもらわなければならないのである。しかし、4単位から2単位になつたように、主婦も専業主婦のように家事ばかりする主婦はもう不要になり、パートやボランティア、介護など多様な業務をこなすようになってもらいたいという、いわば主婦という存在の方向転換あるいは再編成なのである。

また、次のように解釈することもできるだろう。

学校教育における、いわゆる主要5教科は、生産労働にかかわる教科であるのに対して、家庭科は再生産労働にかかわる教科である。つまり、日本の場合、家庭で行われている性別分業が、そのまま学校においても役割分担的に行われてきた。そして、家庭と学校における役割分担は、現在の労働者を支え、未来の労働者を生み育て、将来の主婦養成を行うというように、戦

後、実にうまく作動し、その結果、世界にもまれな経済成長を遂げてきた。

このような状況を、山田昌弘氏は『家族というリスク』の中で「専業主婦という存在は、社会を産業化させることによって、豊かな社会を作り出す装置のひとつであった」と述べている（山田2001）。だから、家庭科教育が主婦養成を行ってきたことも、税制や配偶者控除などの面で主婦優遇政策が取られてきたことも、このような点からすればともに国家的政策であったといえる。国策であり、しかもそれなりに替辞が得られていたので、家庭科教師も主婦も自分の仕事に誇りを持つことができたと考えられる。

しかし、このような体制がうまくいくのにはいくつかの条件が必要であることに注意しておきたい。少子高齢社会を迎えたあたりから、これらの条件が整わなくなってきた。その大きな原因には、山田氏の述べている「産業化」の中身が変わってきて、現在の労働者のあり方や未来の労働者の育て方がこれまでどおりではうまくいかなくなってきたことがあげられる。ここでは、未来の労働者、つまり現在の子どもへの育成についてみていきたい。

●家庭科教師が誇りをもてなくなる理由

学校週休2日制がスタートしたこの4月、「ゆとり」か「学力低下防止」かをめぐって、大いに議論が沸いた。ことに進学校といわれる学校は、生徒の学力低下は学校そのものの死活問題とまで言われ、土曜日には補習を行うのがそのような学校の使命であるかのような論調もあった。石原都知事は、

このような一連の流れのなかで、学校も競争の時代であるから、「私学が土曜も休まず授業をして、それですますます学力がつくだろうから、優秀はおのずからますます明らかになる。」と発言している（朝日新聞4月14日）。

これは学校にも市場原理の競争と能力主義を持ち込み、学校教育を商品化していくことの表明である。その一方で教育費を削減する、いや、教育費を削減したいからこそ、国家や地方自治体では教育を担わず、市場に任せ、競争させるという方向を示していると考えた方がよい。このような政策を「新自由主義」と呼ぶのだが、市場原理に基づく「新自由主義」を「教育」の中に持ち込み、「商品」とか「競争」のような企業の論理で学校を運営していくこと、そのものに大いに留保をつけなくてはならない。教育、福祉、医療の分野は、もともと人間の営みの中で、売り買いしたり、競争したり、優劣をつけたりというような市場原理とは相容れないものである。したがって、石原都知事の言うように、私学でどんどん授業をやって、「よい」といわれる学校になり、「よい」学校を消費者である親や生徒が選ぶ（買う）ことが教育の活性化や向上につながるのだ、と

いう理屈に従っていくことの危険性を問わなくてはならない。

本論の目的は「家庭科教師論」であって「新自由主義」を論ずることではない。けれども、この点を避けては通れないので、「新自由主義」と「教育」とのかかりについて少し触れておきたい。ここでは特に土曜日を返上してまでやらなくてはならない「勉強」「学力向上」の中身について問題にしたい。

私が「進学校」というところに在職していた頃のことを思い出す。私はそのような学校で進学指導や補習、模擬試験などに心血を注いでいることに、とても違和感を持ち続けてきた。なぜなら、それらの「学力」をベースにして生徒につけている学力や知識は、もはや今後生徒たちが生きていくであろう社会にとって、絶対的な有効性を持つものではなくなっているのではないか、という猜疑心が日に日に強まっていたからだ。なぜそのよう

に思ったのかといえば、昨今の高校卒業者の就職率の急激な低下がまずある。そして、大学に進学したものの、ことに女子大生は「超氷河期」といわれるほどの就職難がある。それはいや、男子学生といえども侮れない状況になっている。そして、その就職率の低さを見ると、もはや学生や生徒たちのがんばりや努力不足の結果ではないレベルにまで達している。

なぜこれほどまでの就職難を引き起こしているのだろうか。ひとつには、今の学校制度で教えている知識や技術体系の何割かは、もはや今の、あるいは今後の日本社会の産業に役に立たないものになってしまったからではないかと思うからだ。つまり、これまで学校で得た学力や知識というのは、そのうち社会で役に立つものであったからこそ、その有効性が発揮でき、したがって就職率も高かった。しかし、学校で教えている内容では、もはや今後の産業社会、より正確に言えばポスト

産業社会、脱工業社会には役立たないものが多くなっているとしたら、そのような学力や知識では企業で賃金を得ることは難しくなっているということになる。

佐藤学氏はこれまでの「学力」について「東アジアの国々は、学力競争と受験競争による効率性の高い教育を實踐することによって、教育と産業の『圧縮された近代化』を達成した」と述べている。(注1) つまり、これまでは学校で学んだ知識や技術の高さが、そのまま経済成長と賃金とに結びつく時代にあった。だから「学力」は有効なものであった。しかし、その同じ「学力」が社会に出たとき、かつてのような価値をもたなくなる、つまりかつてのようにお金を稼げなくなつた、この点について佐藤氏は先の著書の中で「『基礎学力』で就職できる単純労働者の市場は壊滅状態にな」つたと述べ、「ポスト産業主義の社会(知識社会)」を生きる子どもたちに必要な

教育は『基礎学力の徹底』ではなく、知識の高度化と複合化に対応できる質の高い学びを実現する教育』であると述べている。

このような問題を家庭科教育と主婦の問題に還元して考えてみよう。主婦は未来の労働者を育てる役目があった。未来の労働者にきちんとした「学力」をつけ、社会に出て働いてくれることが、主婦の再生産労働のひとつの最終目標であった。しかしその「学力」が社会に出て必ずしも役に立つものではなくなってくる。それは主婦の「子育て」あるいは未来の労働者の育成という「目標」がうまく達成できなくなったということである。それは、これまでのモデルに従って主婦役割を行っていくことの存在意義が問われていることにつながる。このような主婦役割の変化や主婦としての存在意義の揺らぎは、主婦養成教科としての家庭科教育の揺らぎを引き起こしていくことになる。つまり、家庭科教育が、これま

で通りの主婦養成教科としての役割を担って行くとしたら、未来の労働者育成が達成できるような「学力」、すなわち佐藤氏が述べる「知識の高度化と複合化に対応できる質の高い学び」を子どもに提供しなくてはならないということになる。

この大きな社会の変化に対応した「学力」を若者につけさせる方向として、2つの点が言えると思う。ひとつは、「新自由主義」的な市場原理による教育方針ではだめであろうということだ。もうひとつは、家庭科教育を「未来の労働者を育成する主婦の養成教科」という役割から、すっかり解放する必要があるということだ。

●これからの家庭科の「独自性」とは

繰り返して整理すれば、これまでの学校の教科内容は、その時代の産業社会に役立つ知識や技術であり、それらを生徒に教えれば、社会に出て賃金

が得られ、労働に直結していた。また、家庭科教育も、学校内ではマイナーなための教科として、(つまりは主婦養成教科として)安定的な地位を確保し続けた。さらに、いわゆる「近代家族」が制度的にも安定しており、家族愛情イデオロギーが健在であり続けられた。主婦も安泰な身分を確保することができた。これら一連の条件は、ひとつのセットであった。そしてこのセットは20世紀の産業システムとして実によく作動してきた。けれども、社会が大きく変化している現在、この20世紀のシステムはあちらこちらにほころびが生じ始めてしまった。

そのほころびは2つあるといわれている。

ひとつは、これまでの産業社会のつげである。つまり、これまでの産業社会はモノを作って消費する、それも大量生産、大量消費を基本としてきた。モノの生産は必ず自然のものを原材料

とし、消費した後、その廃棄物もまた自然に返さなければならぬ。そのよくなかで、自然の再生力が、今危機的状態に陥っている、つまり地球の温暖化や砂漠化など環境破壊の問題が発生していることである。

もうひとつは、賃金労働を重視するあまり、無償の家事労働が軽視され、同時に家事労働がどんどん商品化され、市場の商品となっていく傾向が強まったことである。つまり、家庭の中でこれまで行われていた家事労働がどんどん縮小され、家庭の外でお金を出して行われるようになった点である。結果として家事労働を商品として買えばよいわけであるが、買える人ばかりではない。高齢者、失業者、病人などいわゆる社会的に弱い立場の人は買えなくなってくる。買える人の論理つまり「強者の論理」で社会が動く、社会的病理が進行するという問題がある。そこで考えなければならぬのが、セーフティネットとしての、家事労働

が無償で提供されるシステムである。これが2つ目の問題だ。この2つ目の問題は、家庭科の問題そのものように思われる。

さて、このように今の産業社会ではここに述べたようなほころびが大きくなり、これまでの知識や技術だけがやっついでいこうとしても、そのシステムがうまく回らなくなってしまったことが問題なのである。だから、今の学校の教科体系だけで、どんどん受験勉強させても、どこかおかしいと思うのは当然のことなのだ。これからの社会を生きる若者にとって、このような社会のほころびに対処し、生き抜いていく知識やスキルを学んでもらわなければならないのに、現状はそのようなシステムになっていないからである。

そこで、先にあげた2つ目のほころびの問題について述べたい。それは、家事、育児などアンペイドワークが、社会で果たす役割の見直しということである。これまで何回も述べたように、

家事労働は二義的な労働として軽視されてきた。マルクス主義的な言い方をすれば、生産労働に対する再生産労働として、生産労働に従属させられてきたのである。マルクスの時代はそれでうまくいっていたのでそのような位置付けでよかったのかもしれない。しかし、従属的な再生産労働、つまり家事労働は無償で家庭内で提供されるがゆえに、子どもや高齢者にとっては有効なセーフティネットであった。その家事労働が商品化され、お金をかさなれば手に入らなくなると、子どもや高齢者は、生活に困ってしまう。つまり、社会におけるセーフティネットが縮小すればするほど、社会的に弱い立場の人にしわ寄せが生じてくることになる。

高齢社会になって、年金は大きな問題である。しかし、高齢社会で大切なのは年金などお金だけではない。これまで家庭で行われてきた無償の家事労働というセーフティネットを、今後

いかに確保していくのかということ
は、年金と同様に重要な問題である。
介護などのケア労働を、無償で弱い立
場の人いかに広く分配できるかとい
うことである。マルクスは育児や介護
のような再生産労働は生産労働に従属
するものであるという位置付けをし
た。それは、戦後日本社会では生かさ
れうまく作動してきた。しかし、超高
齢社会を迎えようとしているとき、再
生産労働は生産労働と同じくらい重要
なウエイトを占めるようになったとい
うことが言えるのではないだろうか。
ということとは、今後の社会では再生産
労働が生産労働と同様に扱われ、家事
や育児、介護などの労働は賃金労働と
同等に扱うという視点が必要になるだ
ろう。さらにまた、アンペイドワー
クを、家事労働だけに限定せずにボラ
ンティア、ワーカーズコレクティブ、あ
るいはNGO、NPOなども含めたも
のとして考えていく必要があるかもし
れない。

つまりこれまではアンペイドワー
クⅡ家事労働と限定し、これは社会、
経済における再生産労働であるがゆえ
に、生産労働に従属するものと規定さ
れてきた。その結果、家事労働を担う
主婦と、その主婦を養成する教科であ
る家庭科は、社会や学校において下位
に位置づけられてきた。しかし、これ
まで述べてきた経緯から、今後は家事
労働を広い意味でのアンペイドワー
クとして捉え、いわゆるインフォーマル
な労働の概念で見なおしていく作業が
必要なのではないだろうか。このよう
な時代に直面している今、私たちはそ
れに対応していくための戦略が要求さ
れているといえる。そして、それらは
おそらく現在の学校制度や知識体系だ
けでは対応できないであろうと思われ
る。このような再生産労働としての家
事労働の新たな位置づけは、今後の家
庭科教育にとっても大変示唆に富む視
点ではないだろうか。これまで再生産
労働（家事労働）Ⅱ女性役割として位

置づけられていたものが解消され、よ
りニュートラルな捉え方が可能になる
と考えられる。それは総じて言えば、
家庭科教育の新たな位置づけであり、
家庭科教員の新たな任務が迫られてい
るということではないだろうか。

（注1）佐藤学 2002 『学力を問ひ直す
学びのカリキュラムへ』岩波ブッ
ケットN0548

（注2）山口定 神野直彦編著 2000
『2025年 日本の構想』岩波書店によ
る。

（かじわらきみこ）元公立高校家庭科
教員・大学院生

食の歳時記 入江一恵



夏みかんは初夏の味

緑の風が心地よい。もうすぐやってくるイヤな梅雨を感じさせない。初夏といえは夏みかん、あの甘酸っぱさに子ども頃の思い出がいっぱい詰まっている。讃岐の私の生家の南には夏みかん畠が広がっていた。かなりの古木で、そこは子どもたちのかっこうの遊び場にもなっていた。木に登ってもぎとり、そのままおやつに。私の柑橘類好きは、この頃の習性が抜けきれないためかも知れない。かつては秋の運動会の頃の

青いみかんに始まって夏みかんで終わるものと思っていた。ところがどうだろう、輸入オレンジを含めて国内産の新品種を入れると覚えきれない程の種類の柑橘類が一年を通じて果物屋の店先に並んでいる。でも最も店先での寿命の短いのは、この夏みかんではなからうか。

六月、この季節、八百屋さんの店先にあつという間に並んで消えていくものがある。新しうが、らっきょう、しそ、梅など。お若い人たちには、もう縁のないものだろうか。でも、私はこれらに出会おうとハツとする。大切な自然の恵みに出会った喜びに、多少忙しくともつい買ってしまう。そして真夜中の加工作業がはじまる。多少オーバーな云い方かも知れないが、これを怠ると自然を無視したような罪悪感さえ覚える。「和歌山の父が無農薬でつくった夏みかんです」と近くに住む友人が届

けてくれた。瑞々しい肉厚の皮、マレードはやっぱり夏みかんが高！一年中朝食はパンと決め、ほんの少しのバターを塗り、手づくりのジャムをその日の気分分でのせるのが私の朝の贅沢、梅ジャム、りんごジャム、マレード e t c。昨年四月号でも春につくるマレードについて書いたが、それほど素材は多種で、冬から初夏にひろがっているということであろう。捨てる皮の利用という点から言っても、まさにエコック。今回は3個ずつ朝食の片付後に皮をむき細切り、ペティナイフでワタをとって水につけておき、夕食後、ゆでこぼして煮つめたが、なんとも言えない深い琥珀色に輝く絶品に仕上がった。口に含むとろけるような甘酸っぱさ、ほろにがさが広がった。(作り方は後述)

収穫の季節を逃さないというのが、今一番の贅沢かも知れない。北

海道のアスパラは、桜前線が羊蹄山を北上する五月中旬から収穫が始まるといふ。そう言えば昨年六月末に旭川を訪れた時は、すでにシーズンは終わっていた。しかもホワイトアスパラは、太陽光線にあうと緑化するのので、光と風を避けて日の出前と日没後に収穫を行うといふ。私たちは現在アスパラといえはグリーンアスパラを思い浮かべるが、日本に入ってきたのは江戸時代、食用として作られるようになったのは明治時代北海道でということらしいが、すべてホワイトアスパラであった。そういえば去る三月、三たび北ドイツ、エカンフェルデ市を訪れ、彼の地の朝市を探訪したが、イースター前とあつてずいぶん賑わっていた。でもホワイトアスパラはほんの少し並んでいただけ、「五月になるとおいしさを増し、朝市はあの独得の香りが充満するのですよ」と、帰国後、ド

イツから便りが届いた。それにしても、籐の籠をさげて朝市でバラ売りの野菜や果物を買う彼の地の人たちの何と優雅なことか、トレーにパック詰めされた食材でふくらんだスパーの袋をさげている日本の風景と比較して、文化の違いでは片付けられない切なさを感じた。今月は再び夏みかんママレードに挑戦、ホワイトアスパラのスープもあわせて紹介する。

◆夏みかんママレード

【材料】夏みかん皮3個分、果肉1個分、レモン汁1個分、グラニュー糖350〜400g

【作り方】①皮の汚れを洗い、細く切つて白いワタをベティナイフで削りとり、約10時間水に漬けておく。

②茹でこぼし、水1カップ、果肉、レモン汁を入れて弱火で煮る。(約1

時間)

③グラニュー糖を加えて弱火で煮つめ

る(約2時間) 105度を保つのがよい。★白いワタを取り除いた皮を果肉と共にミキサーにかけて煮る方法もある。

◆アスパラポタージュ

【材料】(生のホワイトアスパラが手に入らない場合は缶詰を使用すると20分できあがる) アスパラ1缶、玉葱30g、バター20g、小麦粉20g、スープ3カップ、牛乳1カップ、塩、胡椒少々、ローリエ1枚、パセリ

【作り方】①ソースパンにバターを入れ、半分程とけた所へ小麦粉を入れ、木杓子でサラサラになるまでいため、暖めた牛乳を入れベシヤメルソースをつくる。

②アスパラと玉葱を荒く切り、スープ1カップ入れてミキサーにかける。

③①と②を鍋に入れ残りのスープ、ローリエを入れて弱火で煮る。

④器にとりわけ、パセリのみじん切りを散らす。

(いりえ・かずえ イラストも著者)

「家事戦争」を乗り越える (上)

竹信 三恵子

家事労働の請求書

「家事神話」の連載を終えて、数カ月たった。家事労働、特に介護や育児などのケア労働が人々の労働全体にいか
に大きな影響を及ぼしているか、この無償労働が「女性
だけの仕事」とされているために、貨幣経済の社会で女
性がいかに不利になっているかを明らかにしようとした
試みだった。

心残りだったのは、日々の生活の中で私たちがこうし
た労働を分け合うために何ができるのかのノウハウ部分
が足りなかったのではないかということだ。中期的には
少子化、短期的には「家族全員を一人が養う」世帯主型
の働き方の高コスト性が嫌われてリストラが進む状況で、
外で働くことを選ぶ女性の動きは強まっている。家庭に
残された無償の労働の配分をめくり、男女間の「家事戦

争」とでもいえる駆け引きは、今後激化するだろう。

女性たちの会合では決まって「理屈はわかった。でも、
私だけが無償の家庭内労働を背負っている状態から抜け
出すには、当面どうすればいいのか」という素朴で切実
な問いが飛び出す。こうした疑問に何とか答えられない
だろうか、という思いが私の中で強まっていった。その
ため、何人かの「戦い」を紹介してみようと考えたのが、
今回の番外編である。

●「ホイキタお掃除隊」登場

「ちゃりずかむばにい 佐伯嘉規様」

「笑顔でつなぐ確かな信頼 ホイキタお掃除隊 池田佳

代」

池田佳代さんは、こんな上書きのついた図のような
「請求書」を見せてくれた。請求先の「ちゃりずかむばに

い」はパートナーの佐伯嘉規さんのニックネームの「ちやり」からつくった架空の会社名。請求者の「ホイキタお掃除隊」も、池田さんが面白がって自分につけた組織名だ。

池田さんが月々行った家事のそれぞれに値段をつけて集計し、月末に佐伯さんに請求する。佐伯さんも自分の家事労働を請求できるが、たいていは池田さんの方が多くて、差額は佐伯さんの支払いとなる。二人は三十代半ばの子どもなしカップルで共働きだ。二人とも外で働いているのに、家庭内の労働をほとんど意識していなかった佐伯さんに、なんとかその量を実感してほしいと考えた池田さんの苦心の策だった。

池田さんは、二十代のころ働いていた会社で佐伯さんと出会った。「二箇所にとどまって長時間労働や会社主義に縛られる正社员的な働き方ではなく、社会活動などと両立しながら働きたい」と、その後、契約社員や派遣の秘書などを軽やかに渡り歩いてきた池田さんは、数年後佐伯さんと再会し、九六年、同居を始めた。結婚して姓を変えなくてはならないのは面倒、という点で意見が一致し、事実婚による夫婦別姓を選んだ。佐伯さんは、一人で家族を背負い込むより二人で働いて家事も分担がいという考え方で、ここでも二人の意見は一致した。

●プール制から請求書へ

ところが、同居を始めて見ると、池田さんのほうに不満がたまり始めた。

佐伯さんの生家は商店で、父が経営し、母が店の合間に家事もするといった家庭だった。だからご飯は、母がつくって呼んでくれる。妹は多少は手伝っていたかもしれないが、家事は知らない間に「だれかが」片付けてくれていた。今考えれば、母が一人で切り回していたということなのだろうが、「家事はだれか手の空いた人がやればいい」という感覚だった。

しかも佐伯さんの仕事は、かなりの長時間労働だった。帰宅が午前三時、四時になることも珍しくない。会社は朝の八時始業で、フレックスタイムの制度を利用して十時には出社しなければならぬ。土日もなかなか休めない。「手の空いた人がやる」という感覚からすれば、佐伯さんの手は「空いていない」のである。

一方、池田さんは、自分のことは自分でする、という家庭で育った。仕事も、比較的きちんとした時間帯で、佐伯さんに比べ家事のできる余地は確かに多かった。だが、生活費は半分ずつ出していたのに、家事労働だけが

請求書

ちゃりずかむばにい
○△■▽様

笑顔でつなぐ確かな信頼
ホイキタお掃除隊
○○区△△OPQRハウス内
TEL3×××-××××
FAX3×××-××××

ご請求金額：¥5,933

請求日：○年○月○日

担当者	▽■△●
請求書番号	K980716
注文受付日	
顧客銀号	705
条件	請求後10日以内現金
清掃日	1998年6月16日～7月16日
掃除方法	掃除機、雑巾がけ、洗濯等
その他	アイロンがけ、食器の片づけ代行
事務手数料	5.0%
請求書宛先	ちゃりずかむばにい
ふりがな	
氏名	▽■△●様
郵便番号	
住所	○○区△△ ○-△-※
電話	×××-×××-×××
FAX	
勤務先	

型番	品名	数量	単価	計
6/16以降	お部屋掃除 (和室) 1	3	¥200	¥600
6/16以降	お部屋掃除 (和室) 2	3	¥200	¥600
6/16以降	お部屋掃除 (台所)	3	¥300	¥900
07/10	トイレ掃除 (徹底版)	1	¥500	¥500
07/10	トイレ用具洗濯	1	¥100	¥100
6/26.7/10	洗面所掃除	2	¥200	¥400
6/16以降	風呂湯掃除	3	¥300	¥900
07/16	流し台/ガスコンロ/壁掃除	1	¥1,000	¥1,000
	ソファ (吸引掃除)	0	¥200	
	ソファ (カバリング)	0	¥100	
07/16	玄関掃除、整頓	1	¥200	¥200
6/16以降	ベッドリネン洗濯	7	¥200	¥1,400
	冷蔵庫掃除 (中/外)			
07/10	電話機/電話台清掃	2	¥100	¥200
※以上割引対象分				
※以降割引対象外				
6/16以降	洗濯 (干す、取り込む等)	10	¥100	¥1,000
6/17～19	食器の片づけ	3	¥200	¥600
06/19	ゴミ捨て (袋取り替えその他)	2	¥200	¥400
07/16	アイロンがけワイシャツ	5	¥50	¥250
割引	対象分のみ50%			ー¥3,400
小計				¥5,650
事務手数料				¥283
前回未払い分				
合計				¥5,933
支払期限：7/26 (日)				

※割引対象分は、二人の共有部分や共有のものであるため50%引きになります。

※割引対象外は共有のものではないため割引はいたしません。

毎度ご利用いただきありがとうございます。今後もどうぞご利用ください。

自分に偏る状況に疑問がわいた。池田さんの家庭での労働を佐伯さんがほとんど意識していない点が納得できなかった。

同居直後、生活費は、池田さんが毎月かかる費用を実績から概算し、これをもとに予算を立てて、折半して徴収していた。生活費を事前にプールしておき、そこから食費などを引き出すやり方だ。ところが、佐伯さんから、本当にそれだけ必要なのか、という声が出た。

そこで、池田さんは実際に支出した分を帳簿につけ、帳簿をもとに請求する方法に切り変えた。ところが、佐伯さんから「帳簿ではわかりにくい」「それだけの費用がかかっているという実感がわかない」といわれた。帳簿をつける側がどれだけ労力をかけているのかわかっているのか、と腹が立った。

帳簿方式はやめ、互いが買った分の領収書をつき合わせ、その差額を清算する方式に変えた。

その過程で池田さんが感じたことは、佐伯さんが家事労働の負担を実感していないために、これにかかる金銭的な負担度も実感できないのではないか、ということだった。

何とかこちらの家事負担度が見えるようにしたいと考えていたころ、九七年、経済企画庁が家事労働の金銭換

算試算を出したというニュースを知った。自分の家事を金銭換算して、佐伯さんに請求してはどうか、と考えついた。仕事柄、経理には詳しく、パソコンソフトを使えば、簡単に集計できることもわかっていった。自らを「ホイクタお掃除隊」と名付け、その家事労働の対価を佐伯さんの「ちゃりずかむばにい」に請求する。とげとげしい気分にならずに、遊び感覚で家事の量をつかんでもらうにはそれしかない、と判断したのである。

●労働が見えてきた

部屋の掃除は二百円、トイレの掃除は手がかかるから五百円と、適当に単価を決めた。二人でやれば半々で相殺、ということにした。友人に請求書を見せると、「こんなに安いのか？」といわれた。でも、高く設定しすぎるとお金が目的になってしまい、家事を奪ってでもやりたくなるおそれがある。それでは「分担」という本来の目的が見失われてしまう。

この案を持ち出された佐伯さんは、「最初は、家事でお金をとられるのか……と思った」という。家事の値段についての経企庁試算の報道は知っていたが、「そんなにかかるかなあ、とぴんと来なかったのが本音」ともいう。

提案を受け入れたものの、長時間労働のため、月によってはほとんど池田さんに依存することになり、最高で九千円を請求されたこともある。だが、考えてみれば、ワイシャツ一枚でもクリーニングに出せばお金がかかる。「家事ってカネがかかるもんだねえ」と意識するようになった。

やがて、佐伯さんは、労働時間が多少は短いコンピュータ業界に転職した。以前より時間の余裕はできたが賃金は下がった。池田さんの請求通り払うのは大変、と実感するようになり、「できるところは自分でやる」と宣言した。

土日は休めることが増えたというものの、今の仕事も、朝十時ごろから夜十一時ごろまでと決して短い労働時間ではない。だから、池田さんと折半で家事をするほどの余裕は今もない。ただ、「家事には一定の時間が必要」という量的感覚が実感できるようになったことで、池田さんが「これをやっておいて」と頼むと、きちんとやっておくようになった。休日には池田さんと一緒に家事をして、「相殺」してもらおう。「結果的によかったと今は思っている」と佐伯さんはいう。

請求書は、佐伯さんが「家事労働」を意識できるようになるにつれて必要なくなり、今ではやっていない。だ

が、知人が池田さんに「うちでも使いたい」と言ってくるようになった。「息子の家庭で使わせたい」という年配の女性もいた。「息子の妻は専業主婦なのに、息子に家事を要求する。息子は結構負担しているように見えるのに、足りないといって怒る。二人の家事労働を正確につかんで公正な配分を実現したい」というのだ。

「家事をお金で返してほしいと本気で思っている人は、意外に少ないのでは」と池田さんはいう。家事は見えにくい。でも自分の働きは公正に扱ってほしい。だから客観視できるよう、量的に測る道具がほしい。「ものさしで測ってみて互いに納得できれば、不公平感も是正される。ものさしづくりは、パートナーとのいい関係の第一歩だと思う」と池田さんはいう。

(たけのぶ・みえこ 新聞記者)

家事の価格の計算表は、パソコンに打ち込むだけで簡単にできる。やってみたい人は池田さんからひな形を提供することも可能なので、編集部に二報を。

職場の男とつきあう法③

満田 康子

ドラマ・フレンド



「障害者の問題は暗い、マイナーだといわれますが、いまテレビのドラマでは人気タレントが主役の障害者を演じて視聴率の高いものがあります。ねえ、Xさん？」

「そうですね。『星の金貨』とか『聖者の行進』とか。僕もよく見っていますが、『聖者の行進』は施設内での暴力をテーマにしている、その描かれ方をめぐって、論争が起きているし、これをきっかけにマスコミが施設内での人権侵害の問題をとりあげるようになったんじゃないですか。」

編集会議で提案した企画が大勢の反対(無言も含めて)で、否決されそうになり、進退窮まってる若いXにふったところ、見事な援護射撃をしてくれたことがある。事前の打ち合わせなど全くしてなかったのだが、Xの一言で

起死回生、編集会議をパスできた(出来上がった本はちやんとヒットした)。

Xとは帰りの電車の中で、トレンディ・ドラマについての蘊蓄を傾けることがしばしばあった。はじめはたまたま同じ番組を見ていて感想を言い合う程度だったのだが、次第にねらいを定めて共通に見るようになった。

Xは、新卒のフレッシュャーだったから、私とは親と子以上の年の差だ。彼は、口のきき方のせいかな、年齢の近い人たちからは「生意気」という批判の声もなくはない青年だが、これだけ年が離れていると、背伸びしているのが見え見えで可愛いと思えてしまう。

今の若者のご多分に漏れずXは情報通。ドラマの情報にもめっぽう明るい。番組新編成の時期に入るやいなやお薦めを披露してくれる。

「今クルールの一押しはやっぱ月九でしょ。脚本が北川悦史子で、さんまとキムタクの共演ですからね。それに深津絵里ですもん。」

「ドロドロ系なら『九龍で会いましょう』ですかね。脚本でいえば『夢のカリフォルニア』も気になるんですが。」

むろんX情報を鵜呑みにしたりしない。ざっと新聞の

TV批評などに目を通し、評判のものは一、二回見る。

脚本家、配役、テーマ、時間帯などの条件で見られるものがしぼられたところで、慎重に共通ドラマを決める。見逃したときにあらすじを聞けるし、ビデオを取り合ったりできるから、とても便利。

最近のジェットコースタードラマは、一瞬見逃すとわからなくなるがあるので、情報交換したり、次回を予測したり。さらに脚本家の技量にまで話は及ぶ。性も年齢も育った環境も関心も異なるから受け取り方が違うことがあり、新鮮な驚きを感じることも多い。私にとっては若い人の考え方、感じ方を知る絶好のチャンスでもある。二年ほど前のシニールな作品「ラブコンプレックス」など、世評にのらなかつたが、周囲の怪訝な顔をよそに、Xと私は熱く謎解きをしたものだ。

無理して若者にすり寄っているわけではない。でもXと話をしていると、テンポの早さに追いつかないことがあるのも確か。とくに固有名詞を忘れるという高齢者特有の問題から私も免れていないから、大変。

「ほら、なんだっけ、うーんと『彼女たちの時代』のつぎちゃん演った人だれだっけ?」

「つぎちゃん?」

「えーと、そうそう、なんとか美穂の妹」

「フフフ、中山美穂? ああ中山忍!」

Xにしたらカッターライにちがいない。それでも気軽につきあうのは、いち早く「クボツカ」や「キタムライッキ」の魅力に惹かれる私のセンスを買っているからと密かにうぬぼれているのだが。私は私で、「彼女たちの時代」というような地味だが等身大の働く女性の生き方を描いた小品を評価する彼の感性が好ましい。ドラマでの女性の描き方を批判しながら、彼に時々見え隠れする男性優位主義をチクチク刺して、そつと「ジェンダー視点」を注入したりして。

その彼が結婚して、一児の父になり、育児休職中である。リストラ時代にこの勇氣ある選択を大いに応援しながら、メールでドラマ談義を続けている。

『九龍』に出ている河村隆一ってなにもの?」

「ミュージシャンです。今は解散したビジュアル系ロックバンド「Luna Sea」のボーカルで、ちよつとナルシストっぽい歌を歌う人です。」

ドラマ・フレンドは、異文化コミュニケーションのガイド役でもある。

(みつだ・やすこ 編集者)

価値の基準が変わる

松本一郎



春は憂鬱だ。毎年2〜3月が鬱の時期になる。それはここ10年くらい続いているリズムなので、この頃は「元氣のない時期」と自分で決めて過ごしている。だいたい鬱になる時は、年度末が近づいて教室の生徒さんが続けるか、お休みにするかの選択の時期でもある。

元々、絵が苦手な人が、キミ子方式で絵を描いて、一つ一つ描いていき、描き方を通して、自分に大事なことはなにかを探していく。そして、最終的には「絵を描くってたのしいな」と思ってもらい「自分もステキだな」と自分の良さに気づいたら、苦手でなくなっている時だと思う。それが、卒業の時だ。

学校などは、期間が決められているから、自動的に卒業になる。しかし、キミ子方式の教室は自分で卒業を決める。だからこそ、いつでも自分で選択できるように受講期間を1

年と決めて、年度末になると、次の年度をどうするか、自分の行動を自分で決める、そのことが大切なのだと、開設当初からスタイルを変えずにいる（ホントはみんなが続けてくれたら、金銭面の心配をしなくてもいいのに、経済的理由で理念を曲げるわけにはいかないのだ）。

そんな鬱の時期に、東京医科歯科大学から講師依頼書がきた。昨年、日赤の看護大学で「絵画療法」という授業のワクをいただきキミ子方式の紹介をさせてもらった。その人づての講師依頼だ。大病院の精神科のデイケアに行っていて、その責任者のご主人が医科歯科大の先生でという流れできた話だとわかった。

日赤の看護大学に行った時も、20歳くらいの若者が40名も集まった講座ってあまりないし、講座後の感想文が楽しかったし、たくさん学べべき事柄の発見があったたのしい仕事

だった。そして、今回も同じに、若者の集団というのはどうなのだろうかと楽しみにしている。

4月の作品展の時期に、キミ子さんと雑談になった。春の話はだいたい新しい教室のことや、楽しかった講座の話をする。そのなかでなにげなく「そういえば、医科歯科大の非常勤講師の依頼がきたよ」といったら「エッ？」と絶句して「どうしてよ、すごいじゃない」と驚いている。こっちの方が「エッ」って感じ。だって、どこに行ってたって、どんな人を相手にしても講座の内容は変わらないし、今までの絵の描き方で自信を失っている人、その人に絵をたのしみを知らせてもらうことはなにも変わらない。なのに場所ですごいのすごくないのってなんか違うんじゃないかなあと思っていた。そのあとで「だってどうしようもない不良だったあなたがよ、高校もまとも

に入れたかったあなたがよ、大学で教えることになるって痛快でしょ。人間生きていれば先がどうなるかわからない。いつでも希望を持ち続けるといいことがあるってことじゃない。劣等生に希望をあたえることができるじゃない」というキミ子さんの話を聞いて、彼女らしいなと思っ

た。それからしばらく経って、キミ子さんの姉さんから自宅に電話があった。彼女はキミ子さんにいわせれば「東大、巨人、朝日新聞っていう人だから……」っていう人で、やはり話題は、非常勤講師の話らしい。「期間はいつからいつまでなの」「大

学も出てないのに……」「なんかコネでもあったの」と聞かれたと家族から聞いた。
母親の世代とボクの世代の考え方の違いかなあとも思った。たのしい仕事だと思つてキミ子方式を教え出

した。仕事だから、あまり思い出したくないこともあるけど、いつでもできる限り誠実に目の前の人と関わってきたつもりだ。目の前のたのしいことだけしていた結果なのにと、いくら力説しても、叔母さんには伝わらない、そんな気がした。

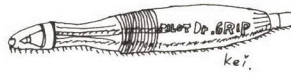
講師をチョイスする大学側にも、
○大を出ているから、紹介者が信用できるから、ではなく、たのしい仕事をしている人を、自分の生徒たちに会わせたいという、ただそれだけの思いで講師を選ぶことができるようになったということだろう。

そうやって、価値の基準が変化してきたのかもしれない。それは自分のような人間にとつては追い風になりそうだ。結局、毎日を自分からのしもうと生きていると、面白そうな話が舞い込んでくるということかな。(まつもと・いちろう／キミ子方式・

講師 イラストも著者)

徒然なるままに from USA

二見 れい子



第3回

ホーム・すくーりんぐ

我が家の13歳と8歳になる二人の息子は、アメリカに来る前も今も、学校に通わないミスター・オールサンデーだ。昼間ブラブラしているの、人から「学校は？」と聞かれるといちいち説明に面倒だったが、こちらに来てからは「彼らはホームスクーラーですか

ら」という一言で済むので、実に楽チンである。

ホームスクーラー。日本では馴染みの薄い言葉だが、アメリカでは、学校に通わずに家庭を基盤にして、それぞれに合った学びを実践する5歳から17歳までの学齢人口は百万人にも上ると言われる。ホームスクーリングは現在アメリカすべての州で合法で、各地に法律面、教育面で、子どもやその親をサポートする支援団体があり、地域で孤立しがちなホームスクーラーとその親たちを直接、間接的に支えている。さらに何と言っても大きいのは、インターネットを通してのネットワーキングと情報提供だ。何時間利用しても市内通話料が基本料金を超えることのないアメリカでは、どんな辺境の地に住んでいても、インターネットに接続するだけで、いずれかのサポートグループにリンクし、意見交換したり、助言を求めることができる。また数ある情報誌を開くと、ホームスクーラーをタ

ーゲットにした教材やサイエンス、スポーツ、アート教室など、夥しい数の有料サービスの広告が次々に目に飛び込んでくる。先日参加した会議で、あるスピーカーが、アメリカでは今や学校でないと学べないことは何もない、と断言していたが、この国の教育業界がここ20年ほどの間に、社会の現実に沿って大きく変革してきたのは間違いない。

ホームスクーラーと一言で言っても、その実践の形態や信条は実に様々で、宗教教育の重要性と親の教育権を強調する保守層から、管理的学校教育に反対し子どもの権利を主張するリベラル派まで、その幅は広い。最近ではホーム・スクーラーという呼び方が、家庭を学校化させる意味合いが強くて馴染まないという理由で、自分たちをアン・スクーラーと呼ぶ層も増えたようだ。たとえば、家で親や家庭教師などの指導の下、カリキュラムや時間割に沿って勉強し、年に一度は自主的に

学力標準テストを受けて、習熟度チェックをするのがホーム・スクーラーの典型だとすれば、アン・スクーラーの多くは、教科や時間割などの枠に縛られずに、自分の好きな遊びやボランティア、教会活動などを通して日常の生活の中から自然に学び育つことに価値をおく。しかし、実際には両者の境界は極めて曖昧で、大多数はこの間を往ったり来たりしながら自分に合ったスタイルを模索しているのが現状のようだし、総称的にはホームスクーリングという言葉が広く使われている。

80年代以降、アメリカでこれほどホームスクーリングが普及した背景には、マスコミ報道に見られるように、若年犯罪の高まり、教師による相次ぐ虐待の発覚で、学校での子どもの身の安全に対する危機感が親たちの間に高まったという現実も見逃せない。ホームスクーリングを選んだというより、やむなく一時的な避難所としてこの道を利用する人が多いのも事実だ。

しかし、最初のきっかけがどんなものであろうと、私がおもしろいと思うのは、学校を離れて新たな生活を組み立てていくプロセスの中で、親も子も学びとは何かを繰り返し問い直し、ひいては、自分の生き方そのものの哲学を迫られてくることだ。子どもの日常生活の変化は親にも影響を与える。たとえば、家で過ごすようになった子どもと一緒にいられるように、仕事時間を調整したり、ホームオフィスに切り替える親も少なくない。「ホームビジネスの始め方」といった親向けの実用的ワークショップが開かれたりする。これまで、学校や会社のカレンダーに合わせて調整していた生活が逆転して、私生活に重点をおいた学びや働き方を求めるようになる。

変化するのは物理的空間や時間だけではない。人は何歳でどの教科をどこまで習得すべきかという、学びについてのスタンダードをどこにおくか。何を学びたいのか。どうやったら効果的

に伝えられるか。何をしているときに一番楽しいのか。こうした問いを子どもに問いかけながら、親もまた自らの学びや生活の優先順位を振り返っていく。日常の何気ない営みを、自分なりに必要な学びのプロセスとして定義し直していく。

こうしたさまざまな変化を、個々の家庭がストレスとして抱え込むのではなく、発見と出会いの喜びに変えていくのに大きな役割を果たしているのが、全米に広がる大小のサポート団体であることは、いくら強調してもしすぎることはないだろう。最後に、地元支援団体の小冊子から一部引用。「今あなたが下そうとしている決断は、まずはこの一年に限られたことで、一生の決断ではありません。だからリラックスして、柔軟かつ現実的に考えましょう。ゆっくりと、子どもを、そしてあなた自身を信頼してよいのだと学んでいけるはずですよ」

来陽子

●風の前の静けさ

いつの間にか師走……だが、私の歩みはいつとき緩む。目白押しだった学校行事がひとまず終わったからである。

ポトボールのゲーム法を工夫し続けていたスポーツ係の子供たちは、今月に入ってやっとそれを会得しようだった。模索すること2ヶ月半。まずどうしてもクラス全員ของทีม分けができなかつたのである。「みんなあ、ポトボールするからチームに分かれてえ」「早くう、並んでよお」「だめだよ！勝手なことしちやあ」「言うこときけよっ！」「あーっ！もう時間がきちやつたじゃないかあ」「係は何してんだよっ」……よくある光景。

校庭の隅に立つ私が一切口出さずにいるため、係の子供たちは四苦八苦していた。メンバー表を作ってみたりみんなをなだめたりすかしたり威圧してみたり。先月のタケシのケガもそんな折りの出来事。勝ちきわまりないその他の子供たち。「早く始めてくれよ」と言う依存型や「そんなのやりたくないよ」と言う「何でも反対」型。ドリブルに興じる子、鉄棒をするグループ、追いかけっこの二人。荒

田さまは一貫して私のそばを離れず梅の木にぶら下がったりジャンブルジムに登ったり……が、なぜか子供たちはここに来て突如我に返ったのだった。「じゃあもういいや、オレたちだけでやろうぜ！……面白そうなゲームに、参加者の数はいつしか増えていく。こんな当たり前のことを子供たちが悟るのに要す時間実に8ヶ月。いわんや大人をや。思い込みとは何と頑ななこと&何事もトコトンやらずして悟りなし。

個人面談も終わり、ここ数日、穏やかな日が続いていた。私は窓の外の山茶花を眺めながら母親たちとの会話を反芻してみる。PTA役員の山上さんからは、「色々なお声が聞こえて参りますので」と言われていたが、母親たちとの面談の感触では、誰一人私を非難しているようには思えなかつた。例えば、先月中旬には展覧会があつた。以前の私なら、展覧会に出す作品にだけはさすがにチェックを入れていた。「もう少し色を濃くしたら？」「ここ、隙間が空いているから、もっと何か描きいたら？」……しかし当然にも今回はノーチェック。テーマを提示しただけだった。ただし図工時間だけは多めに確保して、2・3度念を押したが。「皆さん、これは展覧会に出す作品です。本当にこれでよいんですね」「うん、いいよ。ちゃんと描いたから」私の気持ちにお構いなく、子供たちは気楽だった。そして案の定、我がクラスのコーナーは展覧会場で突出し

ていた。白っぽく曖昧で、不統一きわまりなし。ゆえに「指導力不足」歴然。だが、面談でも批判的な声はまったく聞かえてこなかった。それどころか、会場で会ったある母親など、「みなさんよく描けていますねえ」と嬉しそうだった。美は乱調にあり？ 伝えないことは必ず伝わる。そう確信した瞬間、校庭に日が差し、山茶花の紅い色はいっそう鮮やかになった。

5日。雨で校庭体育ができないため、私はふと思いついてこんな提案をした。

「45分の自由時間をあげましょう。どうぞ自由にしてください。ただし、自分が自由であることと他人が自由であることが同時にできるようにしてください」

二律背反の難しい課題に応えた子供たちの感想は、

☆先生たちがじろじろ見ていたのでこわかった。自由は楽しかったが先生たちにおこれそうなのはイヤだった。

☆おにごっこをしている人がいたから紙飛行機をうまく飛ばすことができなかった。僕も紙飛行機を飛ばして悪いと思ったけど、おにごっこは他のクラスに迷惑。

☆本を読んでいたけどMさんやYくんがうるさくて自由がぬすまれてイヤだった。でもMさんやYくんにとってもそういうふうに言われるのはいやだと思う。

☆ドロケイをやっていたら長田さんたちが先生に言ったので先生が来たからやめて一人で本を読んだ。だけどまだ

ドロケイをしている人がいてとてもうるさかった。長田さんの気持ちがあつた。

☆先生が「人の自由をくずさない」と言っていたのにくずす人がいたので先生にそのことを言おうと思ったけど、そうすると告げ口になるので自分も悪くなる。

子供たちの行動の中で「告げ口」への配慮が幾つかみられるのは、以前私とこんなやり取りがあつたからである。

★よく私への言いつけがあるらしいんですが、みなさんはどうですか？言いつけをすることがありますか。

☆はい（4人）

☆時々（23人）

☆しない（荒田さま1人）

★言いつけをするのはどんなとき？

☆6年生にいじめられるとき。（ケー太）

☆誰かが危ないことをしていて、自分では止められないとき。（リナピー）

☆1年生がいけないことしているからときどき注意するんだけど、その子が言うことを聞いてくれないときしようがないから先生に言う。（ひとちゃん）

★荒田さまだけ全然言いつけしないのはどうして？

☆自分も同じようなことしているから言えない。自分にも責任があるから。（荒田さま）

☆でも、一人じゃどうしようもないこともあるから、そう

桜だ」と連想したとか。

プロペラ

回れ回れプロペラ

とうとうプロペラとんじやって

夜までとんでるぼくのプロペラ

体の大きさに反して気弱だったケー太も次第に生来の頭角を現し、さり気ないつぶやきにも自信のほどが伺えるようになった。身の丈に合った言葉を探り出せているからだろう。

校庭の銀杏の葉はすっかり彼方に吹き飛んでいた。

《1月》

●依存させない!! ヨーコさん!!

3学期が始まった。もはや席替えの必要はなかった。子供たちは授業中も机ごとあちこち自由に移動していたから。コロンブスの卵。なぜ今までこんな単純なことに気づかなかったのだろう。座席は刻々と変化するソシオグラムだった。子供たちのその日その時の心理の反映であり関係性の軌跡……というより波紋。今日は一人でいたいんだな、あの二人もう仲直りしたんだ! あれ? 私のそばに来ていて

いうときはしようがないんじゃないの? (安ちゃん)

☆おまえ、いつも自分から色々やってるのに、よく言いつけしてるよな。(オーちゃん)

風の音に誘われてか、「外に出て詩を作ってみよう」と呼びかけたのは北風の強い日だった。風には負けじと子供たち。歓声を上げながらノートを抱えてジャングルジム・砂場・梅の木などへと走り去る。『フォーラム』は、アンソロジータになった。

石ころ

石ころはえらいな、けられてもなかない

石ころはえらいな、ふまれてもおこらない

石ころはえらいな、さむくてもだだこねない

石ころえらいな

口達者で喧嘩っ早い小柄な白石くん。顔につねに傷もつ身。激動の秋はロッカーや机の下にしぼしぼ潜り込んでいたものだが、このところ茶目っ気が増してきた。

さくらの木 きつちやいけない ワシントン

あの、誇り高く気性の激しいモッチちゃん故の会心の一句。梅の木を見ていたら春のことが浮かんで、「春はやっぱり

ということは何かあったのかも……語りかけてくる波紋に私の動きも自ずと決まる。

だが一方でそれはクラス全体がさらに自然状態に近づいた証でもあり、時として沸き起こるダイナミックな渦の中に私自身飲み込まれ、やがて制御不能となる予兆かもしれない。年を越した29人の子供たちには、教室はもとより学校という枠をも突き破りそうなほどのエネルギーが漲っていたのである。そうだ、より対等の関係であろう。僅かな依存も許さずに。危険回避本能からか、はたまた明快な対峙宣言か、私はこう言った。

「できれば私を先生と呼ばないで欲しいんですが。……例えば、陽子さんとか」

「えっっー」

「ちよつとなあ……」

「いいよ、面白い！」
子供たちの反応は屈託無い。驚く子、照れる子、面白がる子。しかしまた、生真面目に対応する子、どうしても言えない子。

「あのー、ヨーコちゃん、ちよつと校庭に行つて来ます」
「ライちゃん、紙をくれませんか？」

「先生……じゃなかった、ヨーコさん、トイレ行つて来ます」

「先生っ、あつ……」(口を押さえてそのまま引き返す)

おかしくてしかたがないが、私はそのつど真面目な顔で受け答えしていた。何だか一気に若返つたようで嬉しくもなる。そうだ服装も変えなくちゃ……呼び名一つでこんなにも互いの関係が変わり、自分自身も変わるとは。暫くすると、男の子には「ライチュー」女の子には「来さん」か「ヨーコさん」が定着し、お陰で私はすっかり身軽になつた。故にこれからは変幻自在。どんな渦や嵐が沸き起ころうとも大丈夫……にちがいない。

ところで、29人のうちには依然として、増大する一方のエネルギーをひたすら内部に押し込めてしまふ子がいた。17日の保護者会では、ひとちゃんの母親から表情厳しくこんな発言があつた。

「うちの子は今、友達のことと悩んでいます。来先生に相談したいらしいのですが、出来ないようです。前の担任になら言えたようなのに。靴隠しのことにしても、せめて一言先生が注意してくださればいいんじゃないかと思うんですが……」

このところひとときわ内向的雰囲気漂うひとちゃんが、誰かに何か言いたげであることは私ももちろん知っていた。言いたいことがあるなら言いたい人に直接言える子であつて欲しい。が、私のそんな願いなどなかなか届かないひとちゃんだった。母親の、彼女に及ばず影響力があまりに強いために。しかしそれは禁句。言えば不毛な対立を招くだ

け。

「私はひとちゃんにほとんど何も話しかけませんから、近寄りたいたいのかもしれないね。それと、靴隠しのことは私が注意してすむ話ではありません」

私のク穏やかな笑顔は、彼女をきつぱり拒絶する。他の母親たちも無言であった。

……そう言えば私は子供たちを叱らないだけでなく誉めることもまず無かった。休み時間、ひとちゃんはよく一人で教室を掃除していたが、私は見て見ぬ振り。私が誉めれば次の日もまたやらなければならなくなるだろう。うっかり追隨する子が出るかもしれない。ひとちゃんだけの教員ではない私はそんなことにも考慮する。しかし第一の理由は、それがひとちゃんにとって必要な行為に思え、私の出る幕ではなかったからなのだ。いづれにしても今の彼女の本心は彼女自身でさえ計り知れないはず。母親であろうと教師であろうと、他人の安易な声かけは邪魔なだけ。いや、母親・教師であればこそ。ひとちゃんの母親もそれに気づいてくれればよいのだが……。

研究発表会が目前に迫ってきた。研究推進委員長としての私は何につけ校長・教頭によってその進路を阻まれはするが、そのことを含めての研究に今や私は大きな意義を見だしていた。法にからめとられている教員にとって学校改革は膨大なエネルギーを要す。私はそのエネルギーを管

理職とのぶつかり合いから得ていたから。

かなり厳しい現実。だがそれは視点を変えればスリリングで疊惑的なゲームでもある。一瞬一瞬が勝負。子供たちとの授業同様、思い切って踏み出そう。明日は明日の風が吹く。

(つづく／文中登場人物すべて仮名)

(らい・ようこ／主婦・元小学校教員)

※ホームページもご覧下さい。

<http://www.tcn-catv.ne.jp/~Kodomo-Mhrat>

※『Ronza』に書かれた顔末記と、未発表の2年目の実践をまとめた小冊子「小さな冒険者たち」(300円+送料140円)を希望の方はFax 03-3812-2388まで。

女が歳をとるといふこと(第六三回)

木村 栄

ことば

「ほら、クレバスに落ちた人よ」

クレバスじゃないの？

「それがねえ、お洒落なトートバッグなんか持ちちゃって」

トートバッグでしょ。

「柄？ ベイズリーよ」

ペイズリーでしょうが。

「どっちだって同じじゃない」というのは年を取った証拠か。

子どもの頃、母がエベレーターやヒラマヤなどと言うと、ひっくり返って笑ったものだ。ご本人は何がそんなに可笑しいのかと慥然としているが、

このちよつとした間違いに表れる、下町・着物の世界と、新たに侵入したカタカナ文化とのミスマッチ感が可笑しくてたまらなかつたのである。

昔の母との小競り合いを、攻守所を変えて娘とやっている私。カタカナのテンやマルはどうでもよくなつて、「なにげに」とか「ひさぶり」とか「なまあし」なんて若者言葉に生理的についていけないでいる。

意識して獲得した言葉はメッキみたいなもので、年経るとはげて地が出るらしい。

そう言えば、Mが言っていた。子どもの頃躰けられた丁寧な女言葉が、疎開先でいじめの標的にされて、自力矯正で中性的言葉遣いを身に付けたのだが、還暦を過ぎた頃から、昔の丁寧言葉がちよいちよい顔を出すようになった、と。

お注射、お紅茶、お靴、お布団。

それがご亭主にも伝染して、「会社の診療室で、お葉、なんて言っちゃったぞ」と怒るのだ、と笑う。

言葉に年が出るというのは、言葉を覚えた時期の言語環境が顔を出すということかも知れない。とすれば、言葉に対する寛容不寛容の度合いにも同じことが言えそうだ。

私も年相応に若い世代の言葉遣いに違和感を覚えているが、過日、七〇代の女性の新聞投書を読んで驚いた。

「『沢山』はモノに使い、人の場合は『多勢』を使うと習った。だから、テレビで『人が沢山いる』と言うのを聞くと聞き苦しくて落ち着かない」
あら大変、どうしよう。

上には上がある。まこと言葉はなまもの、いや生きもの。以後、みだりに若者言葉に異議申し立てをするのは慎もう。

(きむら・さかえ フリーライター)

神奈川 田中 勢津子

四月号を読んで私の頭にポツと浮かんだ言葉は「風通し」という言葉です。我が家もそこらへんを開け放し、風通しよくしておきたいなあと思いましたが。家の中にこもったよどんだ空気やほこりやもろもろも爽快になるでしょうし、外の楽しい空気も入ってくるでしょう。流れてこそ、風。

子どもの頃、大人数の家に住んでいました。じいちゃん、ばあちゃん、おじ二人、おば、父、母、犬、猫。それから住み込みの店員さんも三、四人一緒だった（製麺屋を営んでいました）。大勢の中には、「今日は働きたくない気分」の人もいたようで、工場に〇〇がない、ということがよくあったそうです。

その〇〇は、たいていが父だったと母が言っていました。かしらのじいちゃんは、「そういう時はほっとけ、一人になりたいもんは、一人にしとけ」と言っていたそうです。

もう四十数年前のこと。戦争で親が

亡くなったという人を引き取って仕事を仕込んだとか、おばあちゃんのことをお母さんと呼ぶ人がたくさんいるんだと、おばあちゃんのお葬式の時き知りました。

いろんな人がたくさんいる中で、私は育ちました。人の出入りも多かったせいか、うちに人が入ることへの抵抗はありません（けれども世に言う、お茶のみは苦手です。ピツタリと窓を締め切った中で、いない人の悪口で盛り上がりつつちゃやう場面にいくわしてから、どうも……）。

子どもが小さいときは、はい、にぎやかでした。子ども同士で遊んでいると、子どもも機嫌良いし、私も息抜けるし、麦茶とポップコーンぐらいサービスするさうって感じでした。

いま、下の息子が家にいるので「お兄ちゃん、あそぼ」とあやちゃん、ゆかちゃん、まりちゃんが寄ってくれます。ありがたいことです。

●フェミックス電話相談のシステム・番号が変わりました。

今年度よりダイヤルQ2をやめ、通常の電話による相談を始めました。編集業務とは別の回線ですので、ぜひご利用下さい。心理的な相談だけでなく、講座企画などの相談、情報提供をご希望の方もご利用下さい。

※時間帯：月～金（土日祝日を除く）10：30～18：00

前もって予約していただければ、これ以外の時間帯でもご利用可能です。

※利用料金：30分以内は3000円 30分～60分まで6000円

相談終了後、振込用紙をお送りしますので、1週間以内にお振込をお願いします。

フェミックス電話相談 TEL03-3410-9937

◎お問い合わせ・お申し込みは下記までどうぞ

東京都世田谷区池尻3-2-3-703 (〒154-0001)

TEL/FAX 03-3424-3603

E-mail femix@mail2.alpha-net.ne.jp

ホームページ：<http://www3.alpha-net.ne.jp/users/femix>

Femix
フェミックス

郵便振替 00130-7-754314 みずほ銀行 池尻大橋出張所 1501277

東京新玉川線（渋谷より1駅3分）池尻大橋駅下車西口より徒歩1分

●権力に迎合する力の使い方は大嫌いだけれど、自分の持っているパワーまで否定してしまったら元気にならない。よいうするに持っている力を何に、どう使うかが大事ということと理解した。このところ「これってやばいんじゃない」と感じているのが有罪立法。こんな法律ができて、戦争に協力させられるのはまっぴらごめん。何事も強要されるのが嫌だから、自分のできるささやかな力の行使（意見広告にカンパ）をした。シャチャヨにも声をかけ協力してもらった。

いよいよ女性のための自己防衛プログラム WEN・DO の（初心者コース）と（指導者養成コース）のワークシヨップのスケジュールが決まりました。カナダから WEN・DO インストラクターのキースティ・パークレーとデボラ・チャードを呼んで開催します。初心者コース（8月17日（土）・18日（日）両日とも9時～17時、会場…国立オリンピック記念青少年総合センター（東京）に参加すると、指導者養成コース（8月26日～5泊6日）の受講資格を得ることが出来ます。

自分自身のために、また女性のための援助にかかわる方にもお薦めです。チラシを挟み込みました。この貴重な機会をお見逃しなく、ぜひご参加下さい！詳細はお問い合わせください。（大沼）

●フェミックスのカウンセリング講座（CRとAT）の受講生だった方から、自助グループの参加者たちの発言集「生きづらい母親たちへ」（ママネット編、解放出版社）という本を送っていただきました。このところ、英語の勉強に励んでいて日本語を読んではなかった（すごい！でしょ？）私が久々に読んだ本です。アダルトチルドレンと言われる人たちが子どもを生んで否応なく自分の中の傷ついたり子どもと対峙せざるを得なくなり、過食やアルコール、リストカットなど様々な形の依存症と闘い、あるいは共存しながら自身を取り戻していくプロセスが当事者の言葉で語られていて、とてもエンパワーされました。生きづらい母親たちだけでなく、楽になりたいと思っただけですべてのアダルトチルドレンにお薦めします。それにしても、この本を読むとカウンセラーなんて要るのかな？と嬉しく

なり、嬉しくなるのは、お互いを受容しあうことで自身を受容していく女たちの、人間の再生能力とでもいうようなものに感動するから。そして、だったらカウンセラーがそんなに頑張らなくてもいいじゃん！と肩の力を抜けるから。これ以上抜いてどうするっていう陰の声が…。（河村）

●ゴールデンウィークは子どものキャンパスにつき合って奥多摩まで出かけた。新緑がきれいだった。子どもたちの作る泥だんごを見て（テレビで見て以来私もつくりたいとは思っていたのだが）「教えて！」と子どもたちを師と仰ぎ、教える乞いながら泥と砂と戯れて二時間あまり、欲張って特大の泥だんごをつくった。「あとはストッキングで磨くといよいよ」と言われ、家でさらに磨いたら、黒光りするりっぱな泥だんごができて我ながら感動した（桐の箱にしまいたくなる気持ちがよく理解できた）。その後は久々にかせをひき、ひどくこじらせて鼻水と咳に苦しんだ。神様がゆつくりしなさいと言っているのだと思う今日この頃。WEN・DOの指導者コースは英語で直接コミュニケーションがとれることが条件に出さ

れていて、英語のできない私はしようがないので聞き直って参加するつもりだが、心配した大沼さんが「じゃあ、事務所の日常会話は英語にしよう、Let's Try」などと言いつつ、「じゃあ、静かにしてようかな」と思う次第である。

特集は「力」がらみで、気力の萎えた私にはしんどいなーと思つて読んでいたら、ちょうど「べてるの家」のファックス通信「ばびぶべぼ」（165号）が送られてきて、その中の「ぶらぶら哲学」を読んでこれに究極のスローワークだと感銘を受けた。「事務局長やって、仕事しなきゃと思つてべてるに行つても、何もできなくて、ずーっと座つてるだけなんだけど、座つてるだけじゃつらい。だから行きたくない」と引きこもつている事務局長の清水さんへの「ぶらぶら族・族長」の松本さんのおことば。「みんなね、「食うために働く」っていう世の中の枠の中にいるんだよね。何のために働くかなんだワ。そして、その枠から一歩抜けたところに金や地位や権力にまどわされない生き方もあるんだワ。「病氣つてバレちゃだめだ。働かなきゃ」って「ちゃんと働

かなきゃ」ってアセつてるうちは病氣はよくならない。それで何か『役割』がないと生きていけない人はまーだだめだね。みんなぶらぶらでできればいいね。うーん、すごい。私もちよつとうつな気分になると、金や地位や権力へのコンプレックスにまどわされ、私に子どもが育てられるんだらうか？と不安がむくむくと高まる。でも今は元氣。河村さんから認知療法の本（『いやな気分よさようならー自分で学ぶ』抑うつ）「克服法」星和書店）を借りて読むうちに、心も頭も整理されたのと、根が単純で飽きっぽいので、うつの気分にはすら飽きてしまうのかも。早速映画に行つてきたのでした。（中村）

●竹信三恵子さんの新刊「ワークシェアリングの実像―雇用の配分か、分断か」（岩波書店）は内外のワークシェアリングの実態の緻密な取材を基に書かれた画期的な問題提起の本です。「家事神話」番外編」は今月から三回の掲載です。お楽しみに。中畝さんの連載「ひげのおぼさん子育て日記」は今月はお休みです。

◆4月号で紹介したニュースタート事務局の「子育て長屋」、第2弾のシンポジウ

ムを6月9日（午後2時）、日本橋社会教育会館」に開催。パネラーは漫画家の石坂啓さん、子どもの社会力の低下に警鐘を鳴らす筑波大学の門脇厚司さん。問い合わせはTEL047-352798まで。

◆この夏、熊本で開催されるWeフォーラムの案内を挟み込みました。7月27日（土）〜28日（日）、会場は熊本市の水前寺共済会館です。お早めにお申込みください。（稲邑）

くらしと教育をつなぐWe

2002年6月号（103号/vol.11 No.3）2002年6月1日発行

定価……680円（本体価格648円+税）
（年間購読料7500円/送料共）

発行……femix・フェミックス
〒154-0001 東京都世田谷区池尻3-2-3-703
tel & fax 03-3424-3603
E-mail: femix@mail2.alpha-net.ne.jp
http://www3.alpha-net.ne.jp/users/femix/
富士銀行 池尻大橋支店 普1501277
郵便振替 00130-7-754314（有）フェミックス

編集……稲邑恭子・中村泰子
装幀……川口民子 イラスト……中村 桂
印刷……（有）イー・エム・ビー

●本誌掲載記事の無断転載、複製をお断りします。

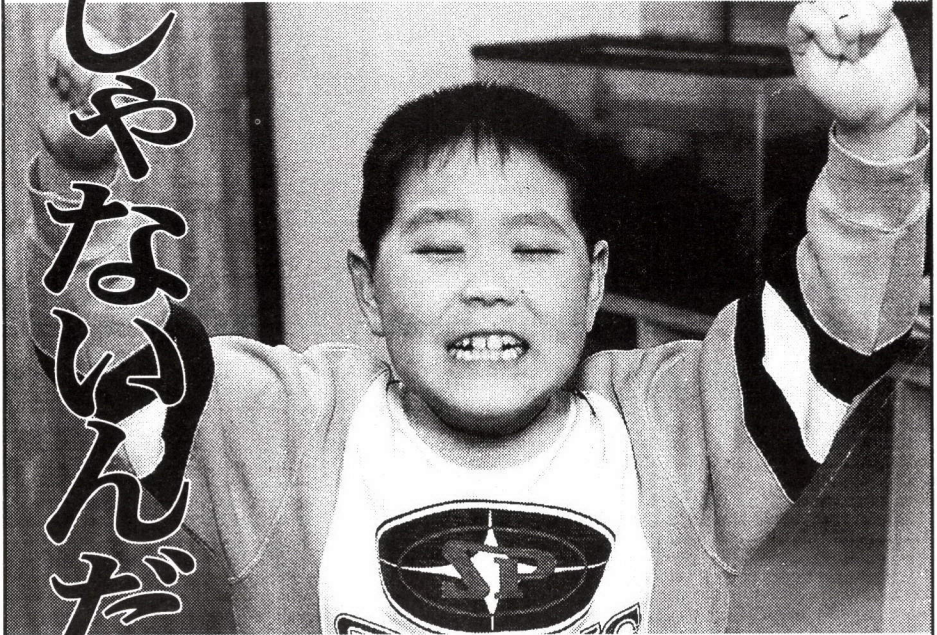
不登校新聞

<http://www.futoko.org>

Phone 03-5360-1231

月2回発行プランケット版6P

理屈じゃないんだよね



見本紙、無料送付します

全国不登校新聞社

購読ご希望の方は、編集部に直接お申し込み下さい。電話、ファックス、E-mail、あるいは郵便振替で○号から購読希望と明記して年間購読料7500円をお振り込み下さい。

- 定価 680円 (本体価格648円+税)
- 年間購読料 7500円 (10冊/送料共)
- 郵便振替00130-7-754314フェミックス

「くらしと教育をつなぐWe」は、もともと家庭科の男女共修の実現のためにスタートした月刊誌ですが、従来の家庭科の枠を超えて、女と男が対等に生きることができる社会の実現のために必要な、さまざまなテーマを取り上げ、特に教育現場において性教育やいじめ防止教育なども包括した「ジェンダーフリー教育」の実現と、「男女共同参画社会」実現のための具体的なノウハウを追求します。

■2002年度特集

4月号 家族をひらく/5月号 ジェンダーと人権

■連載

女が歳をとるといふこと 木村栄◇職場の男とつきあう法 満田康子◇乱読大魔王日記 冠野文◇ひげのおばさん子育て日記 中畝常雄・治子◇過去を振り返らない/先を考えない 松本一郎◇3年1組の12ヶ月 来陽子◇徒然なるままにfrom USA 二見れい子◇終幕 水田宗子

■女と男の家庭科新時代

授業実践/風がかわる匂いがかわる◇新・オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎◇熊本発・困ったときの一発ネタ◇曲がり角の家庭科 梶原公子◇食の歳時記 入江一恵・坂本 薫

◎バックナンバーも販売しています。バックナンバーのリストをご希望の方はお問い合わせください。

■2001年度特集 4月号「いじめ」に立ち向かう/5月号 ジェンダーの視点から「働くこと」を考えるII/6月号「働き方」の発想を変える/7月号 暴力から身を守る/8/9月号 ストリーキング被害に遭わないために/10月号 スローワークで生活を楽しむ/11月号 ころばぬ先の医療消費者教育/12月号 子どもの「参画」と環境学習/2002年1月号 自分を楽にする働き方/2/3月号 試されるフェミニズム

■Weの置いてある書店■

- 北海道 ●旭川一こども富貴堂
- 東京 ●表参道一クレヨンハウス
- 東京ウィメンズプラザ内一パッチワーク
- 新宿2丁目一模索舎
- 西荻窪一ナワ・プラサード
- 大阪 ●ウィメンズブックストア松香堂
- 広島 ●家族社

(書店でご注文の場合は「地方小出版流通センター取扱い」としてお申し込み下さい。)

くらしと教育をつなぐWe 読者募集

フェミックス tel & fax 03・3424・3603

〒154-0001 東京都世田谷区池尻3-2-3サンケイグランドハイツ703

<http://www3.alpha-net.ne.jp/users/femix/>

E-mail femix@mail2.alpha-net.ne.jp